

ピストルの使ひ方

— (前題) — 揚弓)

泉鏡花作

全一章(その1)

はじめ、私は此の一篇を、山媛、また山姫、いづれかにしようと思つた。敢て奇を好む次第ではない。また強ひて怪談がるつもりでもない。

けれども、現代 — — たとひ地方とは言つても立派な町から、大川を一つ隔てた、近山ながら — — 時は晩秋、いやもう冬である。薄いのも、半ば染めたのも散り濟まして、松山の松のみ翠深く、丘は霜のやうに白い。尾花が銀色を輝かして、處々に朱葉の紅の影を映して居る。高嶺は遙に雪を被いで、連山の波の寂然と静まつた中へ、島田鬚に、薄か、

白菊か、ひら／＼と簪をさした振袖の女が丈立ちよくすらりと顯はれた、と言ふと、読者は直ちに化生のものと想はるゝに相違ない。

—— 風俗は移つた。

天衣、瓔珞のおん装でなくても、恚る場面へ、だしぬけの振袖は、狐の花嫁よりも、人界に遠いものの如く、一層人を驚かす。

従つて —— 郡多津吉も、此に不意を打たれたのだと、嘸ぞ一驚を喫したであらうと思ふ。

然るに振袖の娘は、山姫どころか、（今は何と云ふか確でない）……さ、さ、さ、法界……あの女である。當時は、安來節、をはら節などを唄ふと聞く、流しの法界屋の姉さんの假装したのに過ぎない。—— 山人の研究を別として、たゞ傳説と幻象による微妙なる山姫に對して、濫なる題名を遠慮した所以である。

それから —— 暑い時分だから、冷いことも悪

くない。――南天燭の紅い實を目に入れた圓い白雪は、お定り其の南天燭の葉を耳に立てると、仔細なく兎である。雪の日の愛々しい戯れには限らない。普く世に知られて、木彫、練もの、おもちゃにまで出來て居る。

玉子形の色の白い……此のものの語の土地では鶴子饅頭と云ふさうである、ほつとり、くるりと、其のやゝ細い方を頭に、緋のもみぢを一葉挿して、それが紅い鳥冠と見えるであらうか？

氣の迷ひにもせよ、確に然う見えた、と多津吉は言ふのである。

――聞きがきする私のために、偏に此は御承認を願ひたい。

山の上の墓地にして、まばらな松がおのづから、墓所々々の劃に成る。……一個所、小高い丘の下に、蓑で伏せて、蓑の亂れたやうな、草の蓬に包んだ、塚ともいほう。塔婆、石碑の影もない、墓

の根に、たゞ丘に添つて、一樹の記念の松が、霧を  
含んで立つて居る。

笠形の枝の蔭に、烏冠が、ちら／＼と草がくれに、  
紅い。．．．．華奢な女の掌にも入りさうな鶏が  
二羽、．．．．其の白い饅頭が、向ひ合ひもせず、  
前向に揃ふともなしに、横に二個、ひつたりと翼を  
並べたやうに置いてある。水晶に紅をさした鴛鴦の  
姿にも擬へられよう。．．．．

墓へ入口の、やゝ同じたけの松の根に、一寸蟠つ  
て高いから、腰を掛けても足が伸びるのに、  
背かゞみに成つた膝に両手を置いて、多津吉は凝と  
視て居た。

洋杖は根に倒れて、枝にも掛けず、黒の中折帽は  
仰向けに轉げて居る。

こゝからでも分るが、其の白い饅頭は、草の葉に  
もたせて、下に、眞四角な盆のやうに、こぼれ松葉  
の青々としたのが、整然として手で梳いたやうに敷

いてあつた。

俗に言傳へる。天狗、狗竇が棲む、巨樹、大木は、  
其の幹の枝、枝の交叉の一所、氈を伸べ、床を磨い  
た如く、清く滑かである。――禁を犯して採伐す  
るものの、綱を傳つて樹を上りつゝ、一目見るや倒  
に墜落するのが約束らしい。

きれいな、敷松葉は、其の塚の、五寸の魔所、七  
寸の鬼の領とも憚からるゝ。

また、あまた天狗が棲むと傳へる處であつた。

緋の鳥冠の小さな鶏は二羽白い。

多津吉は一度、近々と視て、此處へ退いたまゝ、  
怪みながら、瞻りながら、左右なく手をつけかねて  
居るのである。

(その2)

颯 ー と頸から、爪さきまで、膚を徹して、  
冷く、靜に、此の梢を彼へ通ふ、梢と梢で笏を打つ  
て、耳近に、しかも幽に松風が渡つて響く、氷の絲  
のやうな調律である。

其處へ ー 振袖の女が、上の丘へ、帯から上、  
胸を半身でくつきりと美しく出た。山では、些とで  
も高い處が、遠いやうに見え、また思ひのほか近く  
見える。霧も薄し、此方からは吃驚するほど、大き  
く見た、が、澄切つた藍色の空を遙に來たやうに、  
其の胸から上半分の娘の方は、然も深さうに下の墓  
を覗いて、帽子を轉がして、茫乎うつむいて居る多  
津吉を打撞つたやうに見ると、眉はきりゝとしたが

優しい目を、驚いた様にニりながら、後退りに成つて隠れたが。

しばらくすると、そつと、うしろから、故と足敷を拾つて、半ば輪を描いて近いた。上からすぐ男の居る處へ道はあるが、其の阪下りに來たのではない。丘の向う裏から廻つて、開いた平場を寄つたのである。

「旦那。……………」

旦那と、……………肩越に低く呼んだが、二聲とも呼ばせず、男は直ぐに振向いた。女の近寄るのを、満更知らないのではなかつたらしい。

だから、女も、ものが言ひよかつたらう、もう、莞爾して、

「何をしていらつしやるの。」

下品な唄を、高調子で繰返す稼ぎの所為か、またうまれつきの聲調か、幅があつて、そして掠れた聲が、氣さくな中に、寂しさが含まれる、あはれも、情も籠つて聞こえた。

此方も古塚の奇異に對して、冥想默思した男には相應はない。

「實は——お前さんを待つて居たよ。」  
成程、中折帽を轉がして居る人間らしい。此なら何も、霧でばかし、丘で隔て、間に松の樹をあしらつてまで、骨を折つて二人を紹介するがものはなかつた。

けれども、もう一度、繰返すが、町近くで、然まで高くない此の山、多くの天狗の集り住むと、是沙汰する場所である。雲の形、日の隈など、より／＼に、寂しい影が颯とさすと、山遊びの人々も、川だちの危い淵を避けるやうにして場所をかへるので……丁ど此の邊がいま其の深い淵であつた。

赤土の廣場の松の、あちこちには、人のぶらつくのも見え、谷に臨んで、莫塵毛氈を敷いた一組、二組も、色紙形に遠く視められる。一葉、二葉、紅の葉も散るが、それに乗つたのは鷄ではない。



それに、眞上にもあるやうな、やゝ、大小を交へて、たとへば、古墨の砲臺のあととも思はれる、峰を切崩して、四角に臺を残した、おなじ丘が幾つも幾つもある。上が兀げて、土がきれいで、よく見ると、眺へた祭壇の……其處へ天狗が集りさうで、うそ寂しい。

—— 實は其の幾つかを、或は縫ひ、或は繞つて、山道を來る途中で、もう些と前に、多澤吉は、此の振袖に逢つたのである。

町から上るには、大手搦手と云つたやうに、山の兩方から二口ある。—— 尤も恚うした山だから、草を分け、茨を拂へば、大抵どの谷戸からも攀ぢることが出来る……其の山懷を搔分けて、茸狩をして遊ぶ。但し其には時節がやゝ遅い。従つて、人出も然までにはなかつた。

多津吉は、町の場合 —— 件の搦手の方から、前刻尾づたひに上つて來た。

龍膽りんだうが一二輪りん。

小笹こささの葉はがくれに、茨いばらの實みの、紅玉こうぎよくを拾ひろはむとして、瑠璃るりに装よそほひを凝こらした星ほしの貴女きぢよが、日中にっちゆうを天降あまくだつたやうに。――

「あゝ、龍膽りんだうが咲さいて居ゐる。」

「まあ、此處こゝにも。」

――更あらためて言いふが、其その時ときは女をんなまじりに、三人にんばかり土地とちの知己ちかづきで、多津吉たつきちに連つれがあつた。

其その女をんなのつれが、摘つんで、渡わたすのを、自じ分ぶんの見みつけたのと二本ふたもと三本みもと、嬉うれしさうに手てにした時とき……  
否いや、まだ、其その、一本ひとつもと、二本ふたもと、三本みもとを算かぞへない時ときであつた。

(その3)

丘の周圍を、振袖の一行 ー ー 稚兒鬘に、友染の袖、緋の襷して、鐵扇擬の塗骨の扇子を提げて義經袴を穿いた十四五の娘と、またおなじ年紀ごろ．．．．．一つ二つは下か、若衆鬘に、笹色の口紅つけて、萌黄の紋つきに、紅い股引で尻端折をしたのと、もう一人、．．．．．肥つた大柄な色白の年増で、茶と白の大市松の掻卷の如き衣装で、青い蹴出しを前はだけに、帯を細く貝の口に結んだのが居た。日中と雖も、不意に山道で出會つたら、此にこそは驚かう。

恚る異様なのが、一個々々、多津吉等の一行と同じ影を這はせて歩いた。

彼處に、尾花が十穂ばかり。例のおなじやうな兀げた丘の腹に、小草もないのに、すすきりと一輪咲いて、丈も鬘く蒼さへある．．．．．其の龍膽を、島田鬘の其の振袖、繡珍の帯を矢の字にしたのが、弱腰を嫺やかに、白い指をそらして折つて取つた。

……狩を先んじられた氣が一寸した。

其の多津吉の傍へ、何の介意もなく、する／＼と、襟をちらりと捌いて寄ると、手を觸れるばかりにして、龍膽の紫を黙つてよこした。流れた瞳の清しさ。

「ありがたう。此は何うも。」

とばかり多津吉は、其のまゝ連に連れられようと  
して、ふと見ると、一方は丘、一方は谷の、がけ際  
の山笹を、ひしやげた茶の釜底帽子が、ぐわさ／＼  
と、乾びた音を立てて揺つて、見上皺を額に刻んで、  
もじや／＼眉に、きよろりと目を光らした年配の漢  
が見えた。異様な一行の連らしい。

娘と手を合はせたのに、何となく氣がさして、多  
津吉は其の漢に聲を掛けた。

「茸はありますか。」

「はあ、いや松露でな。」

以てのほか、穏和な聲した親仁は、笹葉にかくれ  
て、崖へ半ば踞んだが、黒の石持の羽織に、びらし

やら袴はかまで、つり革がはの頑丈くわんぢやうに太ふとい、提革靴さげかばんを斜はすにかけて、柄えのない錆小刀さびこがたなで、松まつの根ねを搔廻かきまはして居ゐた。

「……松露しじゆりうがありますか、こんな處ところに。」

「ありますかつて、貴方あなた、ほれ、此これでがす。」  
ころ、ころ。

「ほれ、——諸國しよこく、旅たびをして存ぞんじて居をります。  
砂濱すなはまから、ひよつこりと出でる芋いもづるの奴やつより、此この……山やまの松露しじゆりうが、それこそ眞しんに香かうしい露つゆの凝こつたので、いはば松まつの樹きの精根じゆいんでがしてな。」

「松露しじゆりうを掘ほつてるやうぢや、法界屋はふかいや、景氣けいきが悪わるう  
ございますね。」

男をとこのつれは笑わらつたが、  
「あなた幾いく千金せんかお遣やんなすつたの、御祝儀ごしうぎを。」  
と女をんなのつれが言いつたのに、多津吉たつきちはついうつかり  
で居ゐたのを心着こころづいた。——龍膽りうだうを手折てをつてくれた

其の振袖は、すら／＼と裳に薄を掛けた後姿が見えて、市松大柄な年増は、半身を根笹に、崖へ下りかゝる。・・・見附かつた山の幸に興じたものであらう。秋の山は靜に、其の人たちの袖摺れに、草のさら／＼と鳴るのが聞こえて、釜底帽子の親仁も、若い娘たちも、もう山懷に深かつた。

「其處等をぶらつくうちには又出會ひませう。あの扮装です。・・・見違へはしませんから、わざ／＼引返すのも變ですから。・・・」

だのに、それから、十歩、二十歩とはまだ隔らないうちに、目の下の城下に火が起つた。――恚ういふと記録じみる。――一眸の下に瞰下るさるゝ、縦横に樹林で劃られた市街の一箇處が、恰も魔の手のおつて、森の一束を蒼空へ引上げたやうな煙が濛々と揚つて、流るゝ藍色の川を切つて暗くした。

――町の東と西とに分れて、城の櫓と、巨剎の棟が見える。俗に魔の火と稱へて、此の山に棲む天狗が、遊山を驚かすために、ともすると影のない炎

を揚げて、渠等の慌て騒ぐのを可笑がる・・・  
其の寺の棟に寄つた時は眞の火である。城に近いの  
は空き煙だ、と言傳へる。

—  
— 4

(その4)

丁ど眞中であつた。森の碎けて、根の土を振ふが  
如く亂るゝ煙は。——

見當が、我が住む町内に外れても、土地の人には  
隨所に親類も知己も多い。多津吉の同伴は此の岨路  
を、みはらしの廣場下りに驅出した。

口早に、豫め契つた晩飯の場所と、火事は我が家には直面しない事と、久しぶりなる故郷の山に、心静に一人親むことを言置いたのは言ふまでもない。

驅出した中の婦が、廣場の松を低く、八々と留まつて、前後左右を、男女のばら／＼と散る間に、此の峰の方を振り返つた。肩を絞つて、胸を外らすと、遙に打仰いだ顔はやゝ蒼く、銀香返しの鬢が引戦いで見える。左の腕に多津吉の外套を掛けて居た。

意味は知れよう。

「構はない、構はない、打棄つて　　其處へ

打棄つて　　ー　　ー

多津吉は上から手を振つた。自から龍膽の花は高く揺れた。

聲は届かない。念は通じた。が、言は傳らないから、婦は外套を預つたまゝ、向直つて衝と去つた。

多連吉は一人、塚を前にして、松蔭に居たのである。



「私も貴方に逢ひに来たの。」

「嘘を吐け。」

「あら、眞個だわ。」

帽子をよけて、幹に立つた、振袖は肩ずれに、島田鬻は男よりやゝ高い。

「連の人は？」

「松露を捜して、谷の中へ分れて下りたの。」

「私はお精進の女で、殺生には向かないんです。魚でも、茸でも、いきもの。」

と言ひかけて、一寸背きながら、お轉婆に笑つた。

「あら、可厭だ。——知らないわ。」

「何をさ。」

「いゝえ、いきものをね、分つて？……取るのは、うまれつき拙なんです。ですから松露を捜す氣もなかつた處へ、火事だつて騒ぎでせう。」

煙が見えたわ。あの丘へ驅上ると、もう、其の煙は私の立つた背より低くなつて、火も見えないで消えたんですもの。小火なんですわね。」

「いや、悪戯だよ。」

「まあ、放火。」

「違ふよ。……魔の火と云つてね、此の山の天狗が、人を驚かす悪戯ださうだ。」

「然う、面白いわね。」

諸國を渡る門づけの振袖は、敢て天狗に怯えない。

「ぢやあ、今しがた、こゝに居た、あの、天狗様の悪戯かも知れないわね。」

「こゝに居た、天狗、何處に、何時。」

却て多津吉が驚いた。

「其處にさ。貴方の。」

「え。」

「腰を掛けていらつしやる、松の根を枕にして。」

多津吉は思はず居退いた。うつかり其處へ觸つた手を、膝へ正したほどである。

「仰向けに寝轉んで、蒼空を見て居たんですよ。」

言ふまもなしに、

「御覽なさい。」

背後から、塚へする／＼と、亂菊の裾を、撓わに、

紫の色に出て、

「まだ、整として居ますのね。此の白い鷄も、其の天狗様の悪戯ぢやありませんか。――あゝ、龍膽を。」と、ながしめ清しく、

「まあ、嬉しい。あなたもお手向けなすつたのね。あの、そして此の塚のいはれを御存じなんでしょうか。」

翳せる袖と龍膽の紫の影は添ひながら、烏冠は  
冴えて紅である。

(その5)

「いはれも聞きたし、更めて花の禮も言ひたい  
が、――何だか、お前さんは、魔神の眷屬・・・  
・・と言つて悪ければ、娘か、腰元、でももあるや  
うな氣がする。」

多津吉は軽く會釋して、

「其の鶏は？」

「えゝ、眞個よ。」

と又莞爾しながら、翳した袖を胸に返して、袂の  
先を軽くなぶつた。

「天狗様が拵へて、供へたんですがね。よく、烏  
が啣へて行かなかつたこと――其處等の墓では、  
まだ火の點れた、蝋燭を、眞黒な嘴で啣へて風のや  
うに飛ぶと、途中で、青い煙になつて消えたんです  
のに。」

「烏にして見れば――烏にして見れば、は可  
訝いけれども。」

身を起して、寄ると、塚を前に殆ど肩の並んだ振

袖は、横へ胸を開いて、隣地との土の低い劃へ、無  
雑作に腰を掛けた。こぼれ松葉は苦のやうに積つて、  
同じ松蔭に風の瀬が通つた。

「燃えさしの蠟燭より、緋の鳥冠の鶏は、一寸扱  
ひにくいかも知れない。――嘘のやうだけれど、  
まつたく眞に迫つて居る。姉さん、眞個の事を聞か  
してくれないかね。此の鶴の子饅頭は。」

「あら、眞個ですつてば。」

片手を松葉に、

「だつて、自分で然う云つたんですもの。・・・

・ ・ ・ (俺は天狗だぞ。) ツて。・・・先刻、

落こちてるお客をひろひに――御免なさい、貴

方もお客様ですわね私たち、離れ離れに、彼方此方、

ぶらつきますうちに、のん氣らしく、こゝに寝轉ん

でる人がありますから、此方から・・・脚の方

から入りましてね、いま、貴方が掛けておいでなす

つた其の松の坊主頭――坊主ぢやないんですけ

れど、薄毛がもや／＼として、べる兀の大きい

の。・・・挫げたつて惜くはないわ、薄黒くな

つた麥稈帽子を枕にして、黒い洋服でさ。」

「妙な天狗だね。」

「お聞きなさいよ。何とかウイスキーでんでせう。

壇をさ、——餘り清潔ぢやあない手巾に載せたま  
んまで、……仰向いて其の鼻が、鼻が、

ほゝゝ。」

「鼻が。」

多津吉は眞面目で聞く。

「隆くない、ほゝゝ、一寸撮んで遣らうか知ら、

なんと思つて上から顔を見ると、睡つて居たんぢや  
ないんです。圓くて澁面の親仁様が、團栗目をぎる

／＼と遣つて、（狐か——俺は天狗だぞ、可

恐いぞ。）と云ふから、（可恐いもんですか。）

つて然う言ふと、（成程、化もの黥間だ、わ

はゝ。）大な聲なの、老人の癖に、カラ／＼した

ものよ。どつこいしよなら親仁相應なのに、（や

あ、）と學生さんのやうな若い掛聲で、むくりと

起きた處が、脊の低い、はち切れさうな緊つた身體  
さ。

あなた　　ー　　何うでせう、天狗様の方が股が裂けさうな大胡坐で、づしんと、其の松の幹へよりかゝると、大袈裟な胡坐ツたら。あれなんですよ、むかうの、あの四角いやうな白い丘が、お尻の響でぶる／＼と揺れるやうなの。」

城下の果に霧を展いて、銀線の揺れつゝ光る海の上へ、紅日、山の端の松を沈むこと二三寸。煙のあとの森も屋根も、市街はしつとりと露を打つて、みはらしの樹の間の人影は、毛氈とともに仄暗い。

いま振袖の指した、丘の一つが白かつた。

「圖々しいぢやあないの、（狐、さあ、夥間づきあひに一つ酌をしてくれ。本来は、此處の此の塚は、白い幽霊の出る處だ。）　親仁様、まだ驚かすつもりで居るのか知ら。」

「何、白い幽霊？」  
と、聞き返すが如くにして、衝と膝を折つて屈めた。

「紅い鳥冠の鶏の　ーと云ふのかね。」

「いゝえ、それは／＼美しい婦の方の。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして、白いのはお衣ものも、ですけど、降り積る雪なんですつて。」

「其の天狗が話したのかね。」

「ちびり／＼とウイスをのみながらだから。・  
・いゝ加減お察しなさいよ。・此方の  
木の葉より、羽團扇の毛でも些とは増だらうと思ふ  
から、お酌をしますとね、（聞け　ー娘。）  
と今度はお酌のお庇で、狐が娘に成つたんですが  
ね。・そのかはり、羽團扇の方も怪しくな  
つたの。でも、お話がお話だから、つい聞いたんで  
すわ。」

九州の河童の九千坊とかではありませんけれど、  
此の土地には、ー御覽なさい、お城の奥の野の  
果の黒い山に、八千坊と云つて、むかし、數知れず、  
國一杯に荒廻つた天狗様を祀り籠めた處があるんで  
すつて。ー（これ古服は黒し、俺は旅まはりの



烏天狗からすてんぐで、まだいづれへも知己ちかづきには成ならないけれど、  
いや、何國いづこの果はてにも、魔まの惡戯いたづらはあると見える。僅わずか  
に此この十年ねんばかり前まへまでは、うら枯がれの秋あきから、冬ふゆの  
時雨しぐれの夜よへかけて、―― 迷兒まじこの迷兒まじこの何なんとかや――  
い――と鐘かねをたゞいて、魔まに捉とられたものを探さが  
す聲こゑを、毎晩まいばんのやうに聞きいて、何なんとも早はや首くびを縮ちぢめ  
たものでござります、……と昨夜ゆうへの宿やどで按摩あんま  
が饒舌しやべつた。……俺おれの友ともだちで、十四五年ねんいぜ以  
前んに、此この土地とちへ旅たびをしたものが。――ツて、兀はげの  
親仁おとつせん様が言いつたんですけど、――あなた、天狗てんぐに  
お友ともだちツてあるんでせうか。――  
「八千坊はっせんぼうと云いふくらゐだから、皆みなそれは友ともだちだ  
らうね。」

つい聞入きいつて眞顔まがほで答こたへた。振袖ふりそでは、島田しまだの鬢びんを  
ゆらくと、白齒しらはで片頬かたほゑみ笑あをして居ゐるのに。――

(その6)

鬢びんのほつれに顔かほは尚なほ白しろい。火沙汰ひざたに丘をかを驅かけた  
 と言いふにも、襟裏えりうらの紅くれなゐのちらめくまで、衣紋えもんは着きく  
 づれたが、合あはせた褌つまと爪尖つまさきは、松葉まつばの二針相合にしんあひがつし  
 たやうにきりゝとして居ゐる。

「其その貴方あなた、天狗様てんぐさまの友ともだち・・・友ともだちの  
 天狗様てんぐさま・・・あら、何なんだかこんがらかりました。  
 いえね、其その自分じぶんで天狗てんぐだ、と云いつた親仁様おとつさんの友ともだ  
 ちが、やがて十年ねんほど前まへに、此この土地とちへ來きなすつた  
 時ときも、旅籠はたごでとつた按摩あんまが、矢張やつぱりさ、こゝ十年前ねんまへ  
 までは、うら枯がれの秋あきの末すゑから、冬ふゆの時雨しぐれの夜よへかけ  
 て——迷兒まひごの迷兒まひごの何なんとかや——い・・・で、  
 何なんとも早はやや首くびを縮ちぢめたものでござります、と話はなした  
 と言いふのを聞きいた事ことがあるから、此處こゝの城下じやうかの按摩あんま

は、お景物話に、十年前の神隠しを話すのが習慣と  
見える。 . . . .

「親仁様が然う言ひましてね。おなじ杉山流  
だか何うだか知らないが、昨夜の旅籠で夜が更けて、  
とに角、そんな按摩の話した事だから、眞個か何う  
かは分らないけれど、――山の、此處の、此の塚  
は――

親仁様が、貴方のおいでなさいましたその松に居  
直つて、片膝立てて、手首の長く出た流行らない洋  
服の腕で指さしを。」  
おなじ状に、振袖をさしのべたが、すらりと控へ  
た。

「いやだ、 . . . . 鶴子饅頭が食べたさうだ、  
は . . . .」

「む . . . .」  
多津吉は頬張る如く頷いた。

「やり給へ。 . . . . 第一形もよし、きれいだ

よ。敷いてある松葉は毒には成らない。」

「え、私なんか、お腹がすけば、他國の茸だつて生で食べます。人間は下つてますけれど、そんな事に掛けては仙人ですから、食ものに毒も薬もないんですが、實を入れて、……何ですか、お聞き下さるやうですから、一段語りましてから御祝儀を頂きますわ。」

ね、洋服で片膝立てたのは變なものね、親仁様、自分で名告つた天狗より、桃を持たしたい、大な猿かに見えた事。

貴方、こゝには、――此の城下で、上手名人と言はれた近常さんと言ふ……評判の、いづれ、そんな人だから貧乏も評判の、何ですかね、何とか家とか言つたけれど私にはよく分らない。（指環も簪も拵へるのぢや。）と親仁様が言つたから銚職さんですわね。其の方のお骨が納つて居るんですつてね。」

「あ、銚職――ぢやあ男だね。」  
「然うよ、え、最う随分のお年でしたつて。」

「待ち給へ。．．．骨の入つて居るのが、いゝ年の銚職さん、近常か。．．．それにしても、雪の中の美しい、．．．何だっけね、婦人の白い幽霊と云つたのはをかしいね。」

「まあ、お聞きなさいよ。．．．貴方は、妙に、沈んで落着いて、考へ事をして居るやうに見える癖に、性急だね、．．．一寸年をお言ひなさい、星を占てあげますから。」

と熟と瞳を寄せつゝ、  
「星の性なら構はないけれど、然うでなくツて、そんな様子だと怪我をする事よ。路に山坂がありませんから、お氣をつけなさいなね。」  
「怪我ぐらゐはするだらうよ。．．．知己でもない君のやうな別嬪と、こんな處で對向ひで話をするやうなまはり合せぢやあ。．．．」

「まあ、飛だ御迷惑ね。」  
「いや覺悟をして居る。．．．本望だよ。」  
「嬉しい事、そんなにおつしやつて下さるんですもの、私かつて、．．．お宿までもついて送つて行くわ。．．．途中で怪我なんかさせません」

わ。生命に掛けても。……」

多津吉は聊か氣を打たれたやうに目を二つた。

「同伴は何うなんだね、串戯にも、そんな事を云つて、お前さん。」

「谷へ下りたから、あのまんま田畝へ出て、木賃へ引取りませうよ。もう晩方で、山に稼ぎはなし、方角が然うなんですもの。」

「だつて、一座の花形を、一人置いて行きつこはなからうではないか。」

「其處は放し飼よ。外に埒がないんですもの、もとの巢へ戻ると思ふから平氣なもの。それとも直ぐ歸れなんのつて、つれに來れば、一寸、隱形の術を使ふわ。——一座の花形ですもの。火遁だつて、土遁どろ／＼どろ、すゐとんだつて、焼鳥だつてお茶の子だわ。」

「しかし、それにしてもだね。」

「苦勞性ね、そんな星が知ら。」

「きみの星は！ 年は？」

「年は狐……星は狼……」

「すこ凄いいもんだなあ。――そこ其處で、いま今の話だ  
が。」

—  
—  
7

(その7)

「え、――しろ白い幽靈いうれいの譯わけはね、てんぐさま天狗様があんま按摩  
にき聞いた話を、わたし私にしたんですよ。……よ可  
ご  
ざんすか。

めいぢ明治……なんねんあれは何年とか言ひました、はや早い  
ころ頃です。――そ其のかざりや銚職のちかつね近常さんの、ふるたみ古畳のあほらや茅屋  
へ、けんちやう縣廳からお使者ししやが立ちました。……あこ頤は

すつぺり、頬髭の房々と右左へ分れた、口髭のピンと刎ねた。――（按摩の癖に、よくそんな事を饒舌つたものね）……尤も有名な立派な方ですとさ、勸業課長さん、下役を二人、供に連れて、右の茅屋へお出向きに成ると、目貫、小柄で、お侍の三千石、五千石には、少いうち馴れて居なすつても、……此頃と云つては、つひぞ居まはりで見た事もない、大した官員様のお入ですし、それに不意だし、また近常さんは目が近くつて、耳が遠くつて居なすつたさうですからね、繼はぎさ、――もう御新造さんはとうに亡くなつて、子一人、お老母さん一人の男やもめ。――其のお媪さんが丹精の繼はぎの膝掛を刎ねて、お出迎へ、と言ふ隙もありやしますまい。古火鉢と、大きな細工盤とで劃つて、うしろに神棚を祀つた仕事場に、しかけた仕事の鐵鎚を持つたまゝ、鑿を壓へて、平伏をなさると、――疊が汚いでせう。けばが破れて、じと／＼でせう、弱つたわね、課長さん。……洋服のもつ立尻を浮かして、両手を細工盤について、ぬツと左右の鯨髭。對手が近眼だから似合つたわ。其處へ、いまぢや流行らないけれども割安の附木ほど



の名刺を出すと、銚職の御老體、恐れ入つて、ぴたりとおじぎをする時分には、ついて來た、羽織なしで袴だけの下役が、手拭を出して、そつと課長さんのお尻の下へ當がふといつた寸法ですつて。」

「光景観るが如し………詳しいなあ。」  
多津吉は苦笑した。

振袖は案外眞面目で、

「………お亡くなんなすつてから、あと、直ぐに大層な値に成つて、近常さんの品は、然うなると、お國自慢よ。煙管一つも他國へ取られるな、と皆藏込むから、餘計値が出るでせう。贗もの澤山に成つて、鑑定が大切だが、其の鑑定を頼まれて確かなの自分がつて、按摩、（掌に据ゑて、貫目を計つて、釣合を取つて、撫でてかぐ。）………と然う言ふんですつて、大變だわね。毛彫浮彫の花鳥草木………まあ私のお取次ぎは粗雑ですよ。

（匂がする、）と言ふくらみだから、按摩、それから、それへ聞傳へ、思ひ込んで、（近常の事は餘程悉いやうだ。）と天狗様が、私にさ、貴

方、おじぎの仕方から、もつ立尻の様子まで・・・  
・其の昨夜宿で聞いたつて言ふ按摩の遣つた通り  
ー 按摩は這ひましたとさ、話しながら。ー  
私は時々お酌をしながら聞いて居て、其の天狗様に  
這はれたら何うしよう、と思つたんですよ。いかに  
私だつて氣味が悪い。」

「まさか、晝這ふ奴があるものか。」  
と多津吉は投げるやうに言つて再び苦笑した。

「だつて、其處が魔ものぢやあなくつて・・・  
・それに酔つてるんでせう。ウイで澤山な處へ、  
だん／＼スキツて來てるんですもの。」

「何の事だい、スキツて來るとは。」  
「私にも分らない、ほゝゝ。」

と、片褸を少し崩すと、ちらめく裳、紫の袖は斜  
に成つた。

「承れ、いかに近常 ー と更る處だわね。手  
拭の床几でさ。東京に美術工業大博覽會がある。外  
國に對しても晴の仕事ぢやから、第一は、お國のた

め、又縣のため、續いては、親仁の名譽のため、心血を灌いだ出品をするやうに、――大仕事となれば、いづれ費用も掛らう。手間も要らう。官より直接とは參らぬが、其處は有志の資本家と内約が結んである。何うぢや、親仁。お國のため。――はつと云ふので、近常さん、（阿母喜んで下さい。）と、火鉢で茶を入れて居たおふくろさんと、課長殿の顔を見て、濃い眉の下に露一杯。

不景氣だし、註文は取れず、くらしも、かつ／＼。簪は銀の松葉、それはまだ上等よ。煙管は眞鍮まで承つて、裁縫の指ぬきの、いまも名譽の毛彫の鑿が、針たての穴を敲いて居なすつたつて處だつて言ひますもの、職人に取つては、城一つ、國一郡、知行されたほどの、其の嬉しさ。――あゝ、降つたる雪かな。――

振袖は花やかに、帯の扇をぬいて開いて、片手を白く、折からこぼるゝ松に翳した。

(その8)

「あとで御祝儀を遊ばせ。——法界屋の鉢の木  
 では、梅、櫻、松も縁日ものですがね、……。  
 近常さんは、名も一字、常世が三ヶの庄を賜つたほ  
 どの嬉しさで。——尤も、下職も三人入り、破屋  
 も金銀の地金に、輝いて世に出ました。仕上り二年  
 間の見積の處が、一年と持たず、四月五月と云ふう  
 ちから、職人の作料工賃にも差支へが出来たんです  
 つて、——それがだわね、……。懸廳の息が  
 掛つて、つなぎの資本をおろして居た大商人が、相  
 場か何かで、がら／＼と来て、美術工業の奨励、懸  
 廳のためどころではなくなつたんです。資本が續か  
 ないでせう。近常さんは幾度も幾度も課長どのへ逢  
 ひに行き、縋つても見たんだけれども、横へ匆ねた  
 頬髯が、ぐつたりと下つて弱つて居るの。人はいゝ

んだわね、疊は汚ながつても、さ。

有志の後援を頼みにしたので、お役所にそんな金子の用意はなかつたんです。さあ、然うなると頼んだ職人を断るにつけて、作料を渡すにさへ、御新造さんの記念の小袖。．．．此の方はね、踊のお師匠さんでしたとき。下方もお出来なすつて、．．．貴方がお聞きなさいよ。これなんだから、天狗様に熱を吹かれて居るうちにも、餘計に、其の近常さんが鼻肩に成つたんですよ。．．．其の小袖を年一度、七夕様だわね、鼓の調を渡して、小袖の土用干をなさる時ばかり、花ももみぢも一時に、城も御殿も羨しくないとお思ひなすつた、其の記念まで．．．箆笥は最うない、古葛籠の底から、．．．お墓の黒髪に枕させた、まあね．．．御経でも取出すやうに、頂いて、古着屋の手に渡りましたツて、お可哀相に。ー」

と、さし俯向いて、疊んだ扇子で胸を壓へた。撫肩がすら／＼と、薄のやうに、尾上の風に靡いたのである。

「お待ちないよ、此の振袖。失禮ですが、・・・色はさめました、模様も薄くなりました。でも、それだけに、どんな事で、此が其の御新造さんのお記念かも知れません。・・・此の土地へ來ましてから、つい思ひつきで、古着屋から買ったんですから。」

「一寸。」

「あら、なぜ、袖を引張らないの、持たないんです。」

多津吉は、妙に唇をゆがめながら、

「餘り不躑らしいから。」

と言つた、大島の知らず、紺の羽織の袖を、居寄つて振袖の紫に敷いて熟と瞻たのであつたが、

「せめて、移り香を。」

「厭味たらしい、およしなさい、柄にもな

い。・・・ぢやあ私も氣障をしてよ。」

するりと簪を抜くと、ひら／＼の薄が、光る鞠のやうに、袖と袂と重つた上へ、鬢の香を誘つて落ちた。

「しばらく然うしていらつしやい。―― 離れな

いお禁厭よ。」

「龍膽以上に嬉しいなあ。」

と、寂しさうに笑つた。

「御挨拶だわね。―― 狐の尻尾よ。其の實

は。……暗くなつたらひら／＼燃えるかも知  
れませんよ。

いえね、狐火でも欲しいほど、洋燈がしよんぼり  
點いたばかり、それも油煙に燻つて、近常さんの内  
は又眞暗になりました。……お正月がそれな  
んですもの。霜枯の二月をお察しなさい。お年より  
は臺所で寒の中の水仕事、乏しいお膳の跡片づけ、  
それも、夜の、もう八時すぎ九時ぐらゐ。近常さん  
は、ほかに身の置場のない仕事で、さあ、恚うなる  
と酷いものです。……がら落の相場師は、侠  
氣はあつても苦しい餘りに、そちこち、玉子の黄味  
ぐらゐまで形のついた。……」

ふと黙つて、

「待つて下さい、形は似て居ますけれどもね、いま玉子を言つては不可い。こゝへ、又お使者が飛んで来て、鶏の因縁に成るんですから。」

「然うね、ほんのりと雲と波が明くなつたつて言ひませうか。それツて言ふのが、近常さんの一代の仕事として、博覽會へ出品しようとおもくるみなすつたのが、尺まはりの圓形の釣香爐でしたとさ。地の總銀一面に浮彫の波の中に、うつくしい龍宮を色で象嵌に透かして、片面へ、兔を走らす。蓋は黄金無垢の雲の高彫に、千羽鶴を透彫にして、一方の波へ、毛彫の冴で、月の影を颯と映さうと言ふのださうですから。」

黄金の雲なんか眞先よ。――銀の波も。つて、灰神樂が吹溜つたやうな、手づくねの蛸型に指のあとの波の形の顯はれたのを、細工盤に載せたのを、半分閉ぢた目で熟と見まもつて、たゞ手は冴えても、腕は鳴つても、遣場のない鐵鎚を取りしめ



て．．．．．火鉢に火はなし、氷のやうに。

戸外は大雪よ、貴方。

．．．．．あら、簪が揺れるわ、振落さうとするん  
ぢやあなくつて？．．．．．邪慳よ。然うしといて  
頂戴、後生だから。

一時、．．．．．無念、残念に張詰めた精もつき  
て、魂も抜けたやうに、ぐつたりとなつたのが、は  
ツと氣が着いて、暗い間の内を見なさいますとね、  
向う斜の古戸棚を劃つた納戸境の柱に掛つて居た時  
計がないの。

時計がさ、御新造さんが、其の振袖の時分に、お  
狂言か何かで、御守殿から頂戴なすツたつて、．．  
．．．時間なんか、何時だか、もう分らないんださ  
うですけれど、打つと、それは何とも言へない、好  
い音がするんです。一つ残つた記念だし、耳の遠い  
人だけに、迦陵頻伽の歌のやうに聞きなすつたのが、  
まあ！ ないんでせう。目の所爲か、と擦りながら、  
ドキ／＼する胸で、棒立ちに、仕事場を出て見なす

つたさうですがね、．．．．盗ぬすまれたに違ちがひない。――然さう言いへば何なんだか、黒くろい影かげが壁かべから棚たな前まへを傳つたつた氣きがする、はッ盗ぬすまれた、とお思おもひなさと、上うへ一した度いちどにガツくりと齒はが抜ぬけた氣きと一いつしよ所に、内うちがポカンと穴あなのやうに見みえて、戸と障しやうじ子こも、どんでん返がへし――ばた／＼と、何なんですかね、臺たい所じよの板いたの間まを隔へだての、一いち枚まい破やれ襖ぶすまに描かいた、芭ば蕉せうの葉はの上うへに、むかし／＼から留とまつて居ゐた蝸かた牛むじりが、ころりと落おちて死しんだやうに見みえたんですとさ。．．．．其そ處こが眞ま白つしろな雪ゆきに成なりました。．．．．突つき抜ぬけに格か子うし戸どが開あいたんです、音おとも何なにも聞きこえやしない。」

「尤もつともだね、あゝ、尤もつともだとも。」  
と呻うめくやうに多た津つき吉ちは應おうじた。

(その9)

「葉へも、白く降積つたやうな芭蕉の中から、頬被をした、をかしな首をぬつと出して、づか／＼と入つた男があるんです。袴の股立を取つて居る。やあ、盗賊　　と近常さんが、さがんなさると、臺所から、お媪さんが。　　」

幕末ごろの推込ぢやアあるまいし、袴の股立を取つた盗賊もをかしいと、私も思つたんですけれども。其の股立が、きよろツとして、それが、慌てて頬被を取ると、へた／＼と叩頭をしました。(やあ、大師匠、先生、お婆々様ツ。) さ、．．．．．お婆々様は氣障だけれども、大層な奉りやうなんですとさ。

柴山運八と云つて、近常さんと同業、鋳屋さんだけれども、これは美術家で、其のお父さんと言ふが以前後藤彫で、近常さんのお師匠さんなんです。　　いまは、其の子運八の代で、工場を持つて、何とか閣で、大きな處を遣つて居る。其處の下

職人が駆込んだ使ひなんです。尤も見知合ひで、不  
断は、おい、とつさんか、せい／＼近小父、でも、  
名より、目の方へ、見當をつける若いものが、大師  
匠、先生は．．．一寸、尋常事ではないでせう。  
大切な事を頼みに來たの。  
あの、大博覽會の出品ね　　―　　縣廳から、此の  
銚職へお聲がかりがある位ですもの。美術家の何と  
か閣が檜舞臺へ糶出さない筈はないことよ。

作は大仕掛な、床の間の置物で、．．．唐草  
高時繪の兩柄の車、―　　曳けばきり／＼と動くん  
です。―　　それに臙銀臺の太鼓に、七賢人を象嵌  
して載せた、其の上へ銀の鶏を据ゑたんです。これ  
が呼びものの細工ですとさ。

工藝も、何ですか、大層に氣を配つて、．．．  
世の泰平をかたどつた、諫鼓　　―　　それも打つに  
及ばぬ意味で．．．と私に分るやうに、天狗様  
は言つたんですがね。苔深うして何とかは分りませ  
んでしたわ。．．．塚に苔は生えて居ません。  
と扇子の要で、軽く拂ふにつれて、弱腰に敷くこ

ぼれ松葉は、日に紅く曼珠沙華の幻を描く時、打重  
ねた袖の、いづれ綿薄ければ、男の紺も、落葉に透  
くまで、薄の簪は静である。

「……其の諫鼓とかの出品は、東京の博覽  
會で感状とか、一等賞とか、縣の名譽に成つたさう  
です。——處ですわね、股立を取つた趣は、羽  
にうつ石目一鑿も、残りなく出來上つて、あとへ、  
銘を入れるばかり、二年の大仕事の仕上りで、職人  
も一同、羽織、袴で並んだ處、其の鶏の目に、瞳を  
一點打つと成つて、手が出ません、手が出ないんで  
すとき。（おいでを願つて、……すぐにお  
いでを願つて、願つて、大師匠、先生に一鑿、是非  
とも、）と言ふんださうです。……城下で  
も評判だつたと言ひますし、師匠の家だし、近常さ  
んも、時々仕事中に、まあね、見學と云つた形で、  
閣へ行きなすつたものですから、鶏の工合は分つて  
居ます。

お媼さんは、七輪の焚落しを持つて入らつしやる、  
こちらへと、使者を火鉢に坐らせて、近常さんが向

直つて、（阿母、一番鶏が鳴きました。時計はなうても夜は明けます。・・・鶏の目を明けよ、と言ふおほせ、しかも、師匠のお家から、職人冥加に叶ひました。御辭退を申す筈なれども、謹んで承ります。）（おう、ようしてござれ。）お使者が、（やあ、難有い。）と成りました。

お年よりが、納戸の葛籠を、かさ／＼とお開けなさるのに心着けて、（いや、羽織だけ、職人は此が禮服。）と仕事着の膝を軽くたゝいて、羽織を着て、仕事場の神棚へ、拝をして、唯一つ櫂の如輪木で塵も置かず、拭込んで、あの黒水晶のやうな鑿箆筥、何千本か艶々と透通るやうな中から、抽斗を開けて取らうとして、（片目ぢやらうね。）

ー ツて天狗様が、うけ賣のうけ賣で話をする癖に、いきなり大な聲をしたから、私吃驚した！・・・一寸、おまけに、大目玉八貫小僧のやうに、片目を指の輪で剥き出すんですもの。・

・  
・  
・

職人も吃驚しましたつて、えゝと聞くと、（片

目は富さんが入れましたでござりませう。――  
此の富さんとか言ふのはね、多勢職人をつかつた、  
諫鼓、いさめのつゞみの……今度の棟梁で、  
近常さんには、弟分だけれど相弟子の、それは仕事  
の上手ですつて。

—  
— 10 - - P 293

(その10)

近目と貧乏は馬鹿にして居ても、職にたづさはる  
男だけに、道の覺悟はありました。使者の職人は、  
悚とするなり、ぐつたりと手を支きましたとき。言  
はれる通り、唯た今、富さんが、鶏の瞳を入れよう  
として、入れようとして幾度か、鐵鎚を持つたんだ

さうです。（片目は見事に入れますが、座をかへて、もう一つの目は息が抜けます、精が續かない。慙うではなかつたと思ふが、お恥かしい、）と、はたで何と勧めても、額から汗を流して、（兄哥を頼みませう、お迎へ申して、）と云ふ事だつたのを、近常さんが、丁と、．．．分つて居るんですもの。――富に兩方の目は荷に餘る、しかし片目は入れたらう、と其で、然う云つて聞いたんですわね、．．．凄かつたわ、私．．．聞いて居て。．．．

（いや、兩方とも先生に、）といふのを聞いて、しばらく熟と考へて、鑿を三本、細くつて小さいんですとさ。鐵鎚を二挺、大きな紙入の底へ、内懐へしつかりと入れて、もや／＼雲の蛸型には、鬱金の切を深く掛けた上、羽織の紐をきちんと結んで、――お供を。――

道は雪で明いが、故と提灯、お佛壇の蛸燭を。．．．亡き父はじめ、戀女房。．．．



振袖の聲が曇ると、多津吉も面を伏せた。

「御先祖へも面目に、夜の錦を飾りませう。庭の砂は金銀の、雪は凍つた、草履で可、・・・瑠璃の扉、と戸をあけて、■■のゆきげた瑪瑙の橋と、悠然と出掛けるのに、飛んで来たお使者は朴の木齒の高下駄、一寸化けた山伏が供をするやうだわ。慥うなると先生あつかひ、わざと提灯も手に持つてさ。

バツと燃え立つ毛氈に。」

夕日は言に色を添へ、

「鶏が銀に輝やいて、日の出の紅の漲るやうな、夜の雪の大廣間、蒔繪の車がひとりで廻るやうに、塗膳がづらりと並んで、細工場でも、運八美術閣だから立派なのよ。」

鶏を眞中にして、上座には運八、とそれに並んで、色の白い、少し病身らしいけれども、洋服を着た若い人で、髪を長くしたのが。」

と、顔を斜に見越しながら、

「貴方なんぞも遣りさうな柄だわね、髪を長く……ほ……、遣つた事があるんでせう。似合ふかも知れない事よ。」

「まあ、可い。……其の髪の長いのは。」

「東京の工藝學校へ行つて居る運八の息子な

の……正月やすみで歸つて居て、こゝで鶏に目が入り次第、車を手舁で床の正面へ据ゑて、すぐに荷拵へをして、其の宰領をしながら、東京へ歸らう手筈だつたさうですわ。……仕上りと、其の出發祝を兼ねた御馳走の席なのよ。」

末座で挨拶をして、近常さんは、すぐに毛氈の上をづつと、鶏のわきへ出なされると、運八の次に居た、其の富さんが座を立て出て、双方でお辭儀をして、目を見合つて、しばらくして、近常さんが二度ばかり黙つて頷くと、懐中の鑿を出したんです。

髪の長い、ネクタイの氣取つたのが、づか／＼と其處へ出て来て、

―― やあ、親仁。――

―― これは若旦那様。――

―― 僕の學校の教授がね、教授、教授がね、親

仁の作を見て感心をして居たよ。何處かで何か見た

んだつて。――

―― 東京の大先生が、はッ恐れ多い事で。――

―― 鑿を見せ給へ。――

―― いや、くるひが出ると成りません。――

―― ふウむ、何かね、鳩の目と、雀の目と、

鳩・・・たとへばだな、鳩の目と、鶏の目と、

使ふ鑿が違ふかね。――

―― はあ、鈴蟲と松蟲とでも違ひますわ。――

一座が二十六七人、揃つて顔を見合はせると、それまで、鼻の隆い、長頭を撫でて居た運八が、袴のひだへ手を入れて目禮をしたんですつて。

鐵鎚をお持ちの時、手について居た富棟梁が、つツとあとへ引きました。

其時に近常さんは、羽織の紐を解いて……  
脱がないで、そして氣構へましたツて。……

振袖は扇子を胸に持据ゑて、

「……片膝を軽く……恚うね、近常

さんが一方へお引きなさると。」

簪は袖とともに揺れつゝも、

「鑿を取った片腕を、ぴつたりと太鼓に矯めて、

銀の鶏を見据ゑなすつた、右の手の鐵鎚とかね合ひ

に、向うへ……打つんぢやあなく手許へ弦を

絞るやうに、まるで名人の弓ですわね、トンと矢音

に、瞳が入ると、大勢が呼吸を詰めて唾をのんで居

る、其の大廣間の天井へ、高く響いて……」

(その11)

ハツと多津吉が胸を窪ませ、身を引くのと、振袖が屹と扇子を上げたのと同時であつた。――袖がしなつて、兩つに分れた兩方の袂の間が、爪さき深く、谷に見えるまで、簪の薄の穂のひら／＼と散つて落つる處を、引しめたまゝの扇子で、さそくに掬つたのが、却つて悠揚たる状で、一度上へはずまして、突羽子のやうについて、翻る處を袂の端で整然と受けた。

「色氣は一寸預りませうね。大切な處ですから。……おゝ、あつい。……私は肌が脱ぎたくなつた。……これが、燃立つやうなお定まりの緋縮緬、緋鹿子と言ふんだと引立つんですけれどもね、半襟の引きはぎなんぞ短冊形に、枕屏風の張交ぜぢやあお座がさめるわね。」

と擦るやうに袖を撫でた。その透切した衣の背に肩に、一城下をかけて、海に沈む日の餘波の朱を注ぐのに、尚ほ意氣は徹つて、血が冴える。

「でも、一生懸命ですわ。ー ー 話を話して聞かせた時のウイスキー天狗の顔色を御覽なさい。目がキラ／＼と光つたんです。．．．．近常さんが、其の鑿で、トンと軽く打つて、トンと打つとー ー 給仕に来て居た職人の女房たち、懇意の娘たちまで、氣を凝らして、ひっそりした天井に、大きく訝するやうに響くのに、鶏は、寂と据つて、毛一つも揺れなかつたさうなんですよ。鑿をきめて、熟と視て居なさるうちに、鐵鎚が柔かに膝におりると、（可。）と其の膝を傍へ直して、片側へ廻つて、同じやうに左の目を入れたんですとさ。．．．．天狗の目が又光るのよ。．．．．

一時、何となく陰々とした廣間が、ぱつとまた明るくなりますとね、鶏がくるりと目を覺まして、莞爾笑つたやうに見えたんですつて。ー 天狗が、同じやうに笑つたから不氣味でしたの。

其處へ、運八美術閣をはじめ、髪の毛の長いのはもとよりですわね、残らず職人が、一束ねに顔を出す。．．．．寒の中でせう、鼻息が白く立つて、頭

が黒いの。……輝く鶏の目のまはりに。

近常さんと、富さんは、其の間に、双方手をつき合つて挨拶をなさいました。それから、又直ぐに、近常さんが、人の顔と頭の間で、ぐつと鶏の蹴爪を壓へたんですつてね、場合が場合だもんだから、何ですか……。臺の車が五六尺、ひとりでにきり／＼と動出すのに連れられて、世に生れて、瞳の輝く第一番に、羽搏き打つて、宙へ飛ばうとする處をしつかり引留めたやうでしたとさ。

それはね、近常さんが、もう一本の鑿で、一ー時を造る處ですから、翼を開いて居ませう。一ー一左の翼の端裏へ、刻印を切らうとなすつたんです。

繪ならば落款なんですわね。（老夫！何をする？） 運八がね、鐵鎚の手の揚る處を、……

ぎよつとする間もなかつたものだから、いきなりドンと近常さんの肩を突いて、何をする、と怒鳴りました。此に吃驚して、何の事とも知らないで、氣の弱い方だから、もう、わびをして欲しさうに、夥間の職人たちを、うる／＼と二しながら、（な、な

んぞ粗忽でも。 ) お師匠筋へ手をつくすと、運八がしやり／＼と、袴の膝で詰寄つて、 ( 汝と云ふものは、老夫、大それた、これ、ものも積つて程に見る。一縣二三ヶ國を代表して大博覽會へ出品をしようと言ふ、俺の作に向つて、汝の銘を入れる法があるか。退れ、推參な、無禮千萬。これ、悪く取れば仕事を盗む、盜賊も同然だぞ。餘りの大ものに見驚きして、氣が違ひかけたものであらう。しかし、詫びるとあれば仔細ない。一杯たらさう。 ) いやな言だわね、此の土地ぢやあ、目下に、ものを馳走なとする事を ( たらす ) ツて言ふんですつて、 ( さ、さ、さ、皆、膳につけ、膳につけ。 ) ( いや、あの状でも名譽心があるかなあ。活きたるわけだ。 ) と毛の長い若旦那は、一番に膳について、焼ものの大鯛から横むしりにむしりかけて、 ( やあ、素晴らしい鯛だなあ。 ) 場違ですもの、安いんだわ。

沈み切つて居た、職人頭富さんが、運八に推遣られて坐に返ると、一同も、お神輿の警護が解けたやうに、飲みがまへで、づらりとお並びさ、貴方。



近常ちかつねさんは、驚おどろいたのと、口借くちかしいのと、落膽がっかりしたのと、たゞ何なによりも恥はづかしさに、鑿たがねと鐵鎚かなづちを持つたなりで・・・然さうでせうね　ー　俯向うつむいて居ゐなさいましたつて、もうね、半分はんぶんは、氣きも二平ぼうとしたんでせうのに、運八うんぱちの方ほうでは、まだ然さうでもない、隙すきを見て飛とびついて、一鑿ひとたがね、ー　其處そこへ掛かけては手て練れだから　ー　一息ひといきに銘めいを入れはしまいかと、袴はかまの膝ひざに、拳こぶしを握にぎつて睨にらんで居ゐる。

— 12 p 299

(その12)

私わたしなんぞ、よくは分わかりはしませんけれど、目めは其その細工さいくの生命いのちです。それを彫ほつたものの、作人さくじんと一いつ所に銘めいを入れるのは、お職人しよくにんの習慣ならはしだと言いひますも

の。―― 近常さんのおもひでは、せめて一生に一度―― お國のため、とまで言つて下すつた、縣廳の課長さんへの義理、中絶はしても、資本を出した人への恩返し。……御先祖がたへの面目と、それよりも何よりも、戀女房の御新造さんへ見せたさに、故と佛壇の蠟燭を提灯に、がたくり格子も瑠璃の扉、夜の雪の凍てた道さへ、瑪瑙の橋で出なすつたのに……眞個に其の時のお胸のうちが察しられます。

運八の女房さん―― 美術閣だから、奥さん―― が、一人前、別にお膳を持つて、自分で出ました。……一寸話があるんです……此の奥さんは、もと藩の立派な武家のお嬢さんで、……近常さんの、若くて美男だった頃、其方から縁談のあつた事があるんですとさ、―― 土地の按摩はくはしいんですわね―― (見染められたんだ、怪しからん。)―― 然う言つて、お天狗は、それまでの氣組も忘れて、肩を大揺りに、ぐた／＼したのよ。

尤も、横合から、運八のものに成った事はお話しするまでもないでせう。姿も、なよやか、氣の優しい奥さんですつて。膳をね、富さんの次へ置かうとするのを、富さんが、次へ引いて、上の席へ据えました。そして二人で立つて来て、富さんは膝を支いて手を擧げる。（さあ、ね、近常さん。）と奥さんが背中を擦るやうにして言はれたので、ハツとする。鶏の涙、銀の露、睫毛の雫。――腰を立てても力のない、杖にしたさうな鐵鎚など、道具を懐にして、其處で膳にはついたんださうですけれど、御酒一合が、それも三日め五日めの貧の樂みの、其の杯にも咽せるんですもの。猪口に二つか、三つか、とお思ひなすつたのが、沈んでばかり飲む所爲か、……やがて、近常さんの立ちなすつた時は、一座大亂れで以て、もうね、素裸の額へ、お平の蓋を顛巻で留めて、――お酌の娘の器用な三味線で――（螻螂や、てうらいや、蠅を取つて見さいな）――でね、疊の引合せへ箸を立てて突刺した蒲鉾を狙つて踊つて居る。……中座だし、師匠家だし、臺所口から歸る時、二度の吸もの差圖をして居なすつた奥さんが、（まあ、・

・ ・ ・ 然うでございますか。―― お媪さんにお土産は、明朝、此方から。 ・ ・ ・ ・ 前に悪い川があります、河太郎が出来ますから氣をつけてね。 ） お嬢さんらしいわね、むかアしの ・ ・ ・ ・ 何となく様子を知つて、心あつての言でせう。河太郎の出る、悪い川。―― 其臺所まで、もう水の音が聞えるんですつて、じゃぶ／＼と。 ・ ・ ・ ・ 美術閣の門の、すぐ向うが高臺の町の崖つゞきで、其の下をお城の用水が瀬を立てて流れます。片側の屋敷町で、川と一筋、何處までも、古い土塀が續いて、土塀の切目は畠だつたり、水田だつたり。 ・ ・ ・ ・

舊藩の頃にね、―― 謡好きのお武家、川べりの其の土塀の處を、夜更けて、松風、とかをうたつて通ると、何處か其處の塀の中。―― 中ならいゝんですけど、壁が口を利くやうに、ウウと、つけ謡でうたふんですとさ。何處までも歩行けば歩行くはど土塀がうたひます。―― 餘り不思議だから、熊野、とかに謡ひかへると、又おなじやうに、然も秘曲だと云ふのを謡ふもんですから、一ぱし強氣なのが堪らなく成つて驅出すと、其の拍子に頭から、ば

しやりと水を浴びせられた事なんかあるんですつて。．．．．．又ある武士が、夜半に前へ立つ、怪い女を、抜打ちに斬りつけると、其が自分の奥方の、夢から抜出した魂だつたりしたんですつて。．．．．．可厭な處。．．．．．

――河童は今でも居ますとさ。

近常さんは悄然と、其處へ臺所口から藪について出て行くんです。

座敷では、ぢやか／＼ぢやん。．．．．．ころらは本職だわね。」

と、軽い撥を眞似て、白い指を弾いた。

「頭の顛ぢやあないけれど、額の腕の蓋は所作眞盛り。――（螻螂や、てうらいや、蠅を取つて見さいな）――裸で踊つて居るのを誰だと思つて？．．．．．一寸？」

「あ。」

多津吉は吃驚したらしい顔を上げた。渠は面も上げないで聞いたのである。

— 13 P 302

(その13)

「……其がね、近常さんを、お迎ひに行つた職人なのよ——全體、迎ひに行つてから、美術閣での様子なんぞは、此の職人が、いきなり（目は一つだけか。）と言はれてから以來、ほんとうに大師匠だと恐入つて、あとノ、までも、悉しく細く、さし合のない處でさへあれば、話すのを、按摩も、其方此方から、根穿り葉穿りして、聞いたんださうですがね。——大師匠だと恐入つても、其場の事は察し入つても、飲んだ酒にも酔へば、娘

子には浮かれるわ．．．人間ですもの。富さんが、禪のみつを引張つて、（諫鼓の荷づくりを見届けるまで、今夜ばかりは、自分の目は離されぬ。

近常さんの途中の様子を。）（合點。）．．．

で、いづれ、杯のやりとりのうちに、その職人の、

氣心が分つたんでせう。故と裸體に耳打ちすると、

裸體に外套を引被つて、．．．些とはおまけで

せうけれどもね、雪一條、土塀と川で、三途のやう

な寂しい河岸道へ飛出して、氣を構へて見ますとね、

向うへとぼ／＼と行くのが、はかに人通りのある時

刻ぢやなし、近常小父さん。――其の向うに、こ

んな夜更には、水の妖精が、面を出して、人間界を

覗く水目金のやうな、薄黄色な灯が、ぼうとして、

（蕎麥アウゝ．．．）――と呼ぶんです。

振賣の時、チリンチリンと鳴りますが、似て居るから

つて、風鐸蕎麥と言ふんださうです。聞いても寒い

わね。風鐸どころですか、荷の軒から氷柱が下つて。

――蕎麥を一つ、茶碗酒を二杯．．．前後

に――それまで蟪蛄が蟋蟀に化けて石垣に踞ん

で、見届けますとね、熟と紙入を出して見て居なす

つたつけ、急いで勘定して、（もう一杯、）其の酒を、茶碗を持ったまゝ、飲まないで、川岸へ雪を踏みなすつた。其處に、石で圍つて、段々があるんです。」

「うむ、ある。」

「——と、多津吉が不意に言った。」

女もうつかりしたやうに、

「ざぶり、ざぶりと、横瀬を打つて氣味が悪い。」

下り口の大きな石へ、其の茶碗を据ゑなさいますとね、うつむいて、しばらく拝みなすつた。肩つきが寂しいでせう。そんなに煽切つたのに、職人も蕎麥の行燈で見た、其の近常さんの顔が土氣色だと言ふんですもの。驅寄らうとする一息さきに、蕎麥屋がうしろから抱留めました。」

「難有い。あゝ、可かつた。」

「だから、貴方は慌てものだと、言ふんですよ……蕎麥屋も慌てものだわね。爺の癖に。」



近常ちかつねさんが、（身投みなげと間違まちがへられましたか。）・  
・・・然さうではない。――（よそ様さまのお情なさけで、  
書生しよせいをして、いま東京とうきやうで修行しゆぎやうをして居ゐる俵せがれめが、  
十四五じゆごで、此この土地とちに居ゐますうち、此このさきの英語えいご  
の塾じゆくへ、朝稽古あさげいこに通かよひました。夏なつは三時起さんじおき、冬ふゆは四  
時起あき。其その夏なつの三時起さんじおきに、眠ねむりノ、こゝを歩ありて、  
ドンと躓つまずいたのが此この石いしで、轉ころぶと、胸むねを打うつて、  
少時しばらく、息いきを留とめた事がことござりました。田舎寺あなからのお小  
僧うさんで、矢張やっぱり朝稽古あさげいこに通かよふ、おなじ年頃としころの仲なかよ  
しの友ともだちが來きかゝつて、抱起だきおこしたので助たすかつて、胸むね  
を痛いためもしませんが、もう一息ひといきで、睡ねむりながら川かは  
へ流ながれます處ところ。すれば此この石いしは大恩人だいおんじん。此これがあつた  
ために躓つまずいたのでござりませぬ。石いしは好すきい心持こころもちで居ゐ  
る處ところを、ぶつかつたのは小兒こどもめの不調法ぶてうはふ。通とほりがか  
りには挨拶あいさつをしましたが、仔細しさいあつて、しばらく、  
こゝへ參まゐるまいと存ぞんずるので、會釋あひやくに一獻進いつこんしんせまし  
た。・・・いや思出おもひだせば、尚なほ其その昔むかし、倅せがれが腹おなか  
に居をります頃ころ、女房にようぼうと二人ふたりで、鬼子母神きしもじんさま様さまへ參詣あまゐりを  
するのに、此處こゝを通とほると、供そなへものの、石榴ざくろを、私わたし  
が包つみから轉ころがして、女房にようぼうが拾ひろひまして、こぼれた實み  
を懷紙ふたいしがみにつゝみながら、身からだ體たいの弱よわい女をんなでな、こゝへ

休んだ事もあります。御祝儀なしぢや、蕎麥屋さん、御免なされ。は、は、は。と、寂しさに笑つて、・・・雪道をー（あゝ、ふつたる雪かな、いかに世にある人の面白う候らん、それ雪は鷲毛に似て、）ーと聞きながら、職人が、もう些と思ふのに、其の謡が、あれなの、あれ・・・」

「えゝ。」

「其のおなじ謡が、土塀の中からも、嗶聲で聞こえるので、堪らなくなつて、あとじさりをしながら、背後を見ると、今居たと思ふ蕎麥屋が影もなしに雪に消えたので、わツと言ふと、荷のあつた前を山を飛越すやうに遁げたんですつて。」

「ー話は岐路になりますけれども、勉強はしたいものですわね、其のお小僧さんは、づつと學問を、お通しなすつて、いまでは博士で、何處のか大學の校長さんで居なさるさうです。肝心の、近常さんの倅ですがね。」

「倅・・・成程。」

(その14)

「それは、から、のらくらして居て、何だか今もつて、だらしのない人だつて。……（それはどの近常さん宗旨の按摩に、薩張りひいきがないんだから、以て知るべしだ。）と然う言つてね、天狗様も苦り切つて居たわ。」

「大きに尤だ。以て知るべしだ。成程。」

「ひどく、感心するんだわね。」

「いや、何しろ尤だから。」

「まっただくだわね。」

「——其處で、何うなつたんだらう。それか

ら。」

「お察しなさいよ。……何うなる、とお思ひなさるの？ あなた、なまじつか、御先祖のお位牌

へも面目、と思ひなすつたゞけに、消した蠟燭にも  
恥かしい。お年よりに愚痴を聞かせれば、尚ほ不孝。  
ろくでなしの倅には言つたつて分らないし、それに  
東京へ行つて居るし、情なさの遣場のない、・・・  
・そんな時、世の中に、唯一人、つらい胸を聞か  
せたし、聞いて欲し、慰めても貰ひたいのは、御新  
造さんばかりでせう。近常さんは、御自分の町を隔  
てた、雪の小路を、遠廻りして、あの川。」  
と云つて、松の枝ずれに振袖がすつと立つた。――  
「あの橋、・・・」

姿の紫を掛けはせずや。麓を籠めて、練絹を織つ  
て流るゝ川に、渡した橋は、細く解いた鼓の二筋の  
緒に見えた。山の端かへす夕映の、もみぢに染まつ  
て。・・・

―― 其の橋も、麓の道も、唯白かつた。――  
と言つて袖を翻した、手も手先も、また、ちら／＼  
と雪である。

「ちらほら此處からも小さく見えますね、あの岸の松も、白い蓑を被いで、渡つておいでの欄干は、それこそ青く氷つて瑪瑙のやうです。ですけれども、眞夜中ですもの、川の瀬の音は冥土へも響きさうで、そして蛇籠に當つて碎ける波は、蓮華を刻むやうに見えたんですつて。……極樂も地獄も、近常さんには、最う夢中だつたんですわね。……」

次手に、あちらを御覽なさいまし。あの山の出端に一組、いま毛氈を畳み掛けて居るのがありませう。一ひ あゝ一人酔つて居る。ふら／＼子子のやうだわね。……あれから、上へ上へと見霽の丘に成つて、段々なぞへに上る處。……丁ど此處と同じくらゐな高さの處に、」

振袖姿は、塚と斜めに立つて居る。

「樹林がこんもりして、松の中に緋葉が見えませう。他所のより、づつと色の冴えました、ね。もう御堂も壊れ／＼になりましたし、それだし、此の邊を總體に恚うやつて、市の公園のやうにするのにつけて、御本尊は、町方の寺へ納めたのださうですが、

彼處あそこに、もと、お月様つきさまの御堂おだうがありましたつて。・・・・・お月様つきさまの森もりの、もみぢですもの、色いろは照てりますわ。――餘あまり綺麗きれいだから、一葉ひとは二葉ふたは、枝えだを取とつて來きたのを――天狗てんぐがですよ。白しろい饅頭まんぢうにさして、其その紅あかい鳥冠とさかにしたんだつて言いつたんですがね。

――市しから監督かんとくにつけて置く、山やままはりの巡吏おまはりに、小酷こつびとく叱しかられましたとさ、其その二三枚葉まいはを雀むしつたのを。・・・・・天狗てんぐでも巡吏おまはりにはかなはないんですわね。尤もつとも、手てでなんぞ尋常じんじやうなんぢやなくつて、羽團扇はうちはで拂はたいたのかも知しれません。・・・・・あゝ、あの、緋葉もみぢがちら／＼と散ちりますこと。ひとりで散ちれば散ちるんですけれど。・・・・・此この風かぜの止やんだ静しづかな山やまの暮方くれがたに、でも何處どこか其處そこらの丘をかの上うへから、意趣返いしゆがへしに羽團扇はうちはで吹ふかして居ゐるのかも知しれません。

兀はげ並ならんだ丘をかは一つづつ、山深やまふかき奥おくへ次第しだいに暗くらい。

「近常ちかつねさんは、それですから幻まぼろしの月つきの世界せかいへ、絶すが

りついて攀上るやうに、雪の山を、雪の山を、ね、  
貴方、お月様の御堂を的に、氷に、迂り、雪を抱いて  
来なすつて、伏拝んだ御堂から――もう高低  
はありません、一面白妙なんですから。（今戻つ  
たぞ、これの、おゝ、此の寒いに、まだ石碑さへ立  
てないで、面目ないが、ほかに行く處は、ようない  
のぢや。）と此の塚に、熱い涙をほろ／＼と挨拶  
をなすつた心の裡。・・・・貴方、お世辭にでも  
お泣きなさいよ、・・・・私も話すうちに、何で  
すか、つい悲しくなつて来た。」

と、眩ゆさうに入日に翳す、手を洩るゝ、紅の露  
はあらくなくに、睫毛は伏つて、霧にしめやかな松の  
葉より濃かに細い。

「いや、何うも、私も先刻から、何だか。」  
と、何故か多津吉は肩を揺つて、首垂れた。

(その15)

「其の時ですつて、枝も風に鳴らずに、塚も動かないで居て、此のお墓所が、其のまゝ、近常さんの、我家の、いつもの細工場に成つて、それがたゞ白い細工場で、白い神棚が見えて、白い細工盤が据つて、それで、白い塚が、細工盤と角を取つた長火鉢だつたんですつて。」

多津吉は掌を強く目を拂つて、熟と視る。

「ですから、火も皆白いです。鐵瓶も矢張り白い。——その下に、焚いてありました松の枝が、煙も立たずに白い炎で、小さな朶に燃えて居て、其處に、唯御新造の黒髪ばかり、お顔ばかり、お姿ばかり、お顔は素より、衣紋も、肩も、袖も、膝も眞白な……幽霊さん……」



「あゝ。」

「ね、たゞ、お髪の毛の圓鬘の青い手絡ばかり、天と山との間へ、青い星が宿つたやうに晃々と光つて見えたんですつて。」

あゝ、貴方、お拝みなさるの。

私も拝みたい。」

「一寸！・・・塚の前で、さしむかつて、

私と並ぶと、きみが、其のまゝ、白くなつて消えさうで危つかしい。しばらく、もう、しばらく。」

と息忙しい。

「えゝ、然うね。此の振袖を、其の方のおかたみかも知れないなぞと、自惚れて居るうちは可いけれど、其處へ寄つて、其のお姿と並んでは、消えて了ふもおなじですわね。一寸、此處からお拝み申して

と、腰をすらりと掌を合はせた。

「御免遊ばせ、勝手に風説なんかして。」

と、膝を折りつゝ低く居て、片手に松葉を拾ふ時、

簪を鬢に挿すのであつた。

多津吉は向直つて、

「それから。」

「まあ、其の銅壺に、丁とお銚子がついて居るんぢやありませんか。踊のお師匠さんだつたと言ひますから、お銚子をお持ちの御容子も嬉しい事。――

近常さんは、娑婆も苦患を忘れて了つて、ありしむかしは、夜延仕事のあとといへば、然うやつて、

お若い御新造さんのお酌でいつも一杯の時の心持で。……どんなお酒だつたでせうね、熱い甘露でせう、……二三杯あがつたと思ふと、凍つた骨、枯れた筋にも、一齊に、くら／＼と血が湧いて、積つた雪を引かけた蒲團の氣で、大胡

坐。……（運八が銀の鶏。……では

あれども、職人頭は兄弟分、……先づ出來た。此の形。）と雪を、あの一魂。……鳥冠を捻り、頸を据え、翼を形どり、尾を扱いて、丹念に、でも、あらづもりの形を。――それを、おなじ雪の根の松の下へお置きなされると、鑿は眞個のを懐中から、鐵鎚を取つて、御新造さんと熟と顔を見合つ

て、（目は恚う入れたわ。） 丁！ （左は）  
丁と打込む牙に、あり／＼とお美しい御新造さん  
の鬢のほつれをかけて、雪の羽がさら／＼と動いて、  
散つて、翼を兩方へ羽搏くと思ふと、―― けけこ  
ッこう ―― 鶏の聲がしたんですつて。」

二人思はず、しかし言合はした如く、同時に塚の  
枯草の鳥冠を視た。日影は枯芝の根を染めながら、  
目近き霧のうら枯を渡るのが、朦朧と、玉子形の鶏  
を包んで、二羽に圓光の幻を掛けた。

「―― 然う言つて、幾度も、近常さんは臨終  
の際に、お年よりをはじめ、氣を許した人たちに、  
夢現のやうに……あの霜の尖つたやうな顔に  
も、莞爾してはお話しなすつたさうですがね ――

その何ですとさ、鶏の聲が、谷々へ響いて、ブツ  
と城下へ擴がると一所に、山々峰々の雪が颯と薄い  
紫に見えたんですつて、夜が白みましたの。あゝ、  
御新造さんの面影は最う見えません。近常さんは、  
はッと涙をお流しなすつたさうですが、もう唯悲し

いばかりの涙なみだぢやアありません。可なつかし懐い、戀こひしい、  
嬉うれしい、それに強つよさ、勇いさましさもまじつたのです。  
何どうしてつて言いへばね、雪ゆきをつかねた鷄にほとりの鳥冠とさかが、  
ほんのりと桃色ももいろに染そまりましたつて、日ひの昇のぼり際ぎはの、  
峰みねから雲くもに射さす影かげが映うつつて彩いろどつたんです。

濃こい紫むらさに光ひかるのは、お月つき様の御堂おだうの棟むね。 . . .

— 1 6 3 1 2

(その16)

— 其その頃ころは、こんな山やまの、荒あれた祠ほらですもの。  
お住持ざつぢはなくて、ひとりものの親仁おつさまが堂守だうせりをして居ゐ  
ましたさうです。降ふりつゞいた朝あさぼらけでせう。雀すずめ

わなぢやアありません。いろ鳥のいろ／＼に、稗粟  
を一つかみ、縁へ、供養、と思つて、出て、雪をか  
ついで雪折れのした松の枝かと思ふ、倒れて居る人  
間の形を見つけて、吃驚して、さら／＼と刻んで飛  
ぶと、いつもお参りをかゝしなならない、顔馴染の  
近常さん。抱いて戻つて、介抱をしたあとを、里  
へ……人橋かけるぢやあなし、山男そつくり  
の力ですから、裸おんぶであつたためながら、家へお  
送りはしたさうですが、其れがもとでお亡くなりは、  
何うもぜひない事でしたわね。

……あゝ、また聞こえました、その時の鶏の  
聲。……夜の蓮華の白いの、いま眞青な、  
麓の川波を綾に渡つて、鼓の緒を捌くやうに響いて。

峰の白雪……私が云ふと、ひな唄のやうで  
も、莊嚴な旭でせう。月の御堂の桂の棟。其のお話  
の、眞中へ立つて、かうした私は極りが悪い……

……

と、袖を合はせた肩細く、

「御覽なさい、其の近常さんは、其の眞中へ、兩手をついて、お日様、お月様に禮拜をしたんですつて——そして、取つて、塚にのせた雪の鶏に、——お名を……銘を……」

ふと、ふつくりするまで、瞼に氣を籠め、傾いて打案ずる状して、

「姓がおあんなすつたんですがね……近常さん。」

「勿論、それは、此處で、きみが天狗から聞いたんだね。」

「はあ。」

「生憎、いまだ石碑がない。」

と、袖も寂しさうに塚に添ひ、葉を擦つた。

「名のりは、きみが幾度も言つてくれたので、まざ／＼と、其の顔も容子も、眉毛まで見えるやうに思はれてならないよ。」

「何うして思出せないんでせう。いゝえね、あの、近常さんの方は、——一字、私の名が入つて居たので、餘り覚えよかつたもんですから……」

「あゝ、お近さん。」

「常で澤山。．．．．．近目のやうで可厭ですわ、  
殿方と違ひますもの。――貴方は？」

「いや、それがね、申しおくれた處へ、今のやう  
な眞劍の話の中へは、．．．．．やくざ過ぎて、言  
憎い。が、まあ、更めて挨拶しよう。――話をし  
て、それから、其の天狗は何うしたね。」

「此の山は、何う言ふものか、雑木林なり、草の  
中なり、谷陰なり、男が唯ひとりで居ると、優しい、  
朗かな聲がしたり、衣摺れが聞こえたり、何處から  
ともなく、女が出て来る。圓鬚もあらうし、島田も  
あらうし、桃の枝を提げたのも、藤山吹を手折った  
のも、また草籠を背負ったのも、茸狩の姉さんかぶ  
りも、それは種々、時々だと言ふけれど、いつも聲  
がして、近づいて姿が見える。――と然う言ふの  
が、近國にも響いた名所だ。町に別嬪が多くて、山  
遊びが好きな土地柄だらう。果して寝轉んで居て、振  
袖を生捉つた。．．．．．場所をかへて、もう二三  
人捉へよう。」

「――（旅のものだ、何時でもと言ふわけには行かない。夜を掛けても女を稼がう。）――厚かましいわ。蟒に吞まれたさうに、兀頭をさきへ振つて、ひよろ／＼丘の奥へ入りました。」

「たゞものでない、はてな。」  
多津吉は確と腕を拱いた。

「何しろ、此れは、今の話の様子だと、――故人が鑿で刻んだと言ふ、雪をつかんだ鶏の鳥冠に、旭のさしたのを象徴つたものだ。緋葉も尚ほ濃い。……不思議なものやうな氣がする。たゞの白い饅頭では斷じてない。はてな。」  
と、のばして觸れようとした手を、膝に拳して、固く成つて控へた。

「天狗が氣になる。うっかり觸ると消えはしないか。」  
「消えれば口の中ですわ。……祝儀をくれない天狗なんか。」

姉さん、此處はばらがきで、



「私にやらう……と言つたんですもの。眞個の天狗の雛ツ子だつて。」

また奇妙に、片袖をポンと肩に掛けて、多津吉の眉の前へ、白い腕を露呈に、衝とかゞみ腰に手を伸ばして、ばさりと巢を探る悪戯のやうに――指を伏せても埒あく處を――両手に一つ宛饅頭を、しかし活ものの如くふわりと軽く取つた。

立直つた時である。

「あら／＼火事が。」

多津吉もすつくと身を起した。

「また火事か！――いや、火事ぢやない。あれは、彼處に、大きな坊さんの銅像がある。それに夕日が當るんだよ。」

月の御堂のあとと言ふ、一むらの樹立、しかも次第高なれば、其の梢にかくれたのが、もみぢを掛けた袈裟ならず、緋の法衣の如くニと立つた。

水平線上は一脈金色である。朱に溶けた其の波を、

火の鳥のやうに直線に飛んで、眞面に銅像を射たのであつた。

— 17

17 p 316

(その17)

しばらくして、男女は、臺石の巖ともに二丈六尺と稱する其の大銅像の下を、一寸ぐらゐに歩行いて居た。あはれに小さい。が、松と緋葉の中なれば、さすらふ渠等も恵まれて、足許の影は駒を横へ、裳の蹴出しは霧に乗つて、對の狩衣の風情があつた。

「――前刻、多津吉のつれの女が、外套を抱へたまゝ振返つて、上を仰いだ處は、大造りな手水鉢を境にして、尚は一つ展けた原の方なのである。」

「――振袖が朗な聲して、

「まあ、貴方、何故おじぎをなさらないの。さつきは、法界屋にも、丁寧に御挨拶をなすつたのに、貴いお上人さんの前にさ――」

「おちかさん。」

多津吉は、盥の如きき鐵鉢を片手に、片手を雲に印象した、銅像の大きな顔の、でつぷりした頤の眞下に、屹と瞳を昂げて言つた。

「……これは、美術閣の柴山運八と、其の子の運五郎とが鑄たんだよ。」

波頭、雲の層、累る蓮華か、象徴つた臺座の巖を見定める隙もなしに、聲とともに羽織の襟を拂つて、づかど銅像の足の爪を、鳥の嘴の如く上から覗かせて、眞背向に腰を掛けた。

「姓は郡です・・・職人近常の・・・」  
私は其の倅の多津吉と云ふんだよ。」  
「あゝ多津吉さん。」

その肩を並べて、莞爾して並んで掛け、  
「まあ、嬉しい・・・御自分で名を言つて下  
すつたのは、私の占筮が當つたより嬉しいわ。さう  
して占筮は當りました。此の大坊主つたら、一體誰  
なんです。」

と肩を一層、男に落して、四斗樽ほどの大首を斜  
めに仰ぐ。・・・俗に四斗樽と云ふのは蟒の頭  
の形容である。濫に他の物象に向つて、特に銅像に  
對して使用すべきではない。が、鑄たものが運八父  
子で、多津吉の名が知れると、法界屋の娘の言葉も、  
お上人様が坊主になつた。

「・・・橋の上、大通りの辻・・・高臺  
の見霽と、一々數へないでも、城下一帯、此の銅像  
の見えることは、此處から、町を見下ろすとおんな

じで……また其の位置を撰んで据ゑたのださ  
うだから、土地の人は御來迎、御來迎と云ふんだね。  
高山の大霧に、三文、五文に人の影の映るのが大佛  
に成つて見ると言ふのにたとへてだよ。勿論、運  
八父子は、一度聞けば誰も知らぬものがない、昔の  
大上人として此を鑄たんだ。――不思議に、きみ  
は未だ知らないやうだけれど、五つ七つの小兒に聞  
いても、誰も知らぬものはなからうね。」

「蓮如さん、」

「さあ、」

「親鸞上人。」

「さあ、」

「弘法大師。」

「さあ、それが誰だつて、何だつて、私は失禮を  
する氣は決してないんだ。唯運八父子の手に成つ

た……」

「勿論ですわ。――法界屋にお辭儀をなすつた

方が、この木菟入道に……」

おゝ、今度は木菟入道。」

「挨拶をなさらないのは。――あなた、私ね、前刻通りがかりに、一度拜んだんですよ。御利益は些ともない。ほゝゝ、誰が此の下で法界屋を唄はせたり、匆ねさせたりするものがありますか。そんな事より、唯大きな、立派なもの。・・・尤も、むくみが来て、些とうだばれては居ますがね。」

背筋を捻ぢて、臺座に掛けた秋の蝶の指の細さ。

「御覽なさい。餘計な耳を押立てて、垂頬で、ぶよ／＼ツチャアありやしない。・・・でも場所が場所だし、目に着くことと云つたら、國一番此の通りですからね。――此の鶏を。」

・・・・包みもしないで――翠を透かして、松原の下り道は夕霧に尚ほ近いから――懐紙に乗せたまゝ、雛菓子のように片手に据ゑた。

(その18)

「あなた、折角、私がおさがりを頂いたんですか  
らね、あの塚から、」

その古塚は、あはれ、雪に埋れた名工と、鼓の緒  
の幻の陽炎に消えた美女のおくつきである。

「二羽巣立をして、空へ翔けるやうに、波ですか、  
雲ですか、此處へ備へようと思つて持つて來たんで  
すけれどもね、—— ふゝんだ、誰が、誰が・・・  
」

頸を白く、銅像に前髪をバラリと振つた。下唇の  
揺れるやうな、烏冠の緋葉を、一葉ぬいて、其の黒  
髪に插したと思ふと、

「あゝ、おいしい。」

早い事。

「なか／＼、おいしい。天狗の雛兒。―― あ  
なたも一つめしあがれ。」

「……」  
「あら、卑怯なことね、お毒味は済んでるのに。」

と、あとのに、いきなり又皓齒を當てると、

「半分を、半分を、其のまゝ、口から。」

と、たとへば地藏様の前に地獄の繪の生首を並べ  
た状に、頸を引抱へた、多津吉の手を、一寸遁げて、  
背いて捻つた女の唇から、たら／＼と血が溢れた。  
一種の變相と同じである。

「や、中毒つたか。」

と頬に頬をのしかゝつて、  
「毒でも構はん、一所に食べよう。」

「あいつつ。」  
と、眉を顰めた。松葉が睫毛に掛つたやうに。



「噛みはしない、噛んだか。いや噛んだかも知れない。きみに詫げる。謝罪する。……失禮だ。がきみの、自分を思つて……。生半可の横御へで、償ひの多少に依りさへすればこんな事は屹と出来る。……二度目にあの塚へ、きみが姿を見せた時から、然う思つた。悪心で然う思つた。――此處へ連れて来て、銅像の鼻前で、きみの唇を買つて、精進坊主を輕蔑して遣らうと思つたんだ。慈悲にも忍辱にも、目の前で、此の光景を視せられて、侮辱を感じないものは斷じてないから。――うむ、然うだ。坊主を輕蔑する本心にも手段にも、聊もかはりはない。が、きみに對して、今は誓つて悪心でない、眞心だ。眞實だ。許してくれ。而して輕蔑さしてくれ。」

「はなして……。よ。」  
然も、打睡るばかりの双の瞼は、細く長く、忽ち薬研のやうに成つて、一點の黒き瞳が恍惚と流れた。其の艶麗なる面の大きさは銅像の首と相齊しい。男の顔も相齊しい。大惡相を顯じたのである。従つて女の口を洩るゝ點々の血も、彼處に手洗水に湧く水

脈に響いて、緋葉をそぐ灌であつた。

「あ。」

「痛い、刺つて、」

「や、刺か。」

獣の顔は離れた。が、女の影は鳥のやうに地に動いて、裾は尾を細く、すつと緊まる。

「何でせう。」

衝と懐紙に取つたを見よ。

「あら大きな針……まあ釘よ。……」

「釘？」

と、多津吉は眉を寄せつゝ、却つて忘れてでも居るやうな女の手から、其の疵つけたものを撮み取つて凝と視ると、視るうちに、わな／＼と指が震へた。

「父親の鑿だ。」

「えゝ、近常さんの……」

「見てくれたまへ——此の尖へ、きみの口の裡の血がついて。」

絹絲きぬいとの纏もつれの紅あかいのを、衝つと吸すふ端はしに持もちかへた。  
が、

「もとの處ところに、これ、細ほそい葉はを二筋ふたすぢと、五辨ごへんの小ちひさな花はなが彫ほつてある。．．．．父親おやぢは法華宗ほつげしうのかたまり家やだつたが、仕事しごとには、天満宮てんまんぐうを信心しんじんして、年としを取とつても、月々つき／＼の二十五日にちには、屹きつと一日いちにち斷食だんじきして居ゐた。梅うめの紋もんを、其そのまゝは勿體もつたいないと言いふ遠慮えんりょから、高山かうせんに咲さく．．．．此この山やまにも時ときには見みつかる、梅鉢草つめばちさうなんだよ。此この印いんは。――尤もつとも、一心いっしんを籠こめた大切だいじな鑿たがねにだけ記しるしたのだから。――これは、きみの口くちから聞きかしてくれた．．．．無論むろん私わたしも知しつて居ゐる．．．．運八うんぱちのために、其その一期いちごの無念むねんの時とき、白しろい幽靈いづれいに暖あためられながら、雪ゆきを搥つかんで鷄とりの目めを彫ほり込んで、曉あかつきに息いきが凍こほつた。其その時ときのものかも知しれないと．．．．知しれないと、私わたしは、私わたしは思おもふんだ。」

(その19)

「違ちがひありませんよ、屹きつと、屹きつと然さうに。ー  
ですもの、活いきてるやうな白しろい饅まんじゅう頭づが、それも、あ  
との一つの方は、口くちへ入いれると、ひなノ、と血ちが流なが  
れるやうに動うごいたんですの。・・・天てん狗くのなす  
業わざだわね。お父とうさんの其その鑿たがねで、何どうしたら可いいで  
せう、私わたし凄こほいわ。何なんですか、震ふるへて來きた。ぞくノ、  
して。」

「笑わらつてくれたまふなよ、私わたしには一人ひとりの父おや親ぢだ。」  
鑿たがねをば押おし頂いたき、確しかと懷ふと中に挿さ入しいれた。

「風ふう來らいもので、だらしはないがね、職しよく人にんの子こだか  
ら腹はら卷まきを緊しめて居ある。」  
と突つき入いれつゝも肩かたが聳そびえ、  
「まつたく、ぞくノ、もしよう、寒さむ氣けもしよう、

胸も悪からう、唇も汚らしからう。堪忍してくれたまへ。……そのかはり、今ね、憤るなよ……お轉婆な、きみが嬉しがる、ぐつとつかへが下つて胸の透く事をしてお目に掛ける。――其處らの連中も、よく見て置け。」

と、なだらに下る山の端に瞳を向けた。が、行きつれ、立ち交る人影は、みなおり口の阪へ行く。……薄き海の光の末に、烏の立迷ふ風情であつた。

「ちかさん、父親を鼻肩の盲人にさへ、土地に、やくざものに見離された……此の故郷へ、何のために歸るものか。」

意氣は獨り激しさうだ。が、する事はだらしがない。外套は着て居なかつた。羽織を捌いた胸さがりの角帯に結び添へ、希くは道中師の、上は三尺とも言ふべき處を、薄汚れた紺めりんすの風呂敷つつみを、それでも緊と結んだと見えて、手まさぐる

と……

「解いてあげませうか。」

「いや、大丈夫。……きみたちは知るまい

なあ。――むかし此處等で、小學校へ通ふのに、

いまのやうに洒落た舶來ものは影もないから、石盤、

手習草紙と言ふ處を一絡めにして……武者修

行然として、肩から斜つかけ、其奴はまだ可いがね、

追々寒さに向つて羽織を着るやうに成ると此の態裁

です。――しかし膚に着けるには此が一等だ。震

災以後は、東京ぢや臆病な女連は今でも遣つてる。」

と言つて、膝の上で、腰辨當のやうな風呂敷を、

開く、と見れば――一挺の拳銃。

晃然と霜柱の如く光つて、銃には殺氣紫に、蒼め

る青い龍膽の装を凝らした。筆者は、此を記すのに

張合がない。何故と云ふに、咄嗟に拳銃を引出すの

は、最新流行の服の衣兜で、此を扱ふものは、世界

的の名探偵か、凶賊かでなければならぬやうだか

らである。……但し、名探偵か、兇賊でさへ

あれば、其が女性でも差支へのない事は註に及ばぬ。

風呂敷には、最う一品――小さな袖姿見があった。尤も八つ花形でもなければ柳鶯の装があるのでもない。單に、圓形の姿見である。

婦も、些と張合のないやうに、さし覗き、兩の腕を白々と膝に頬杖した。高島田の空に、夕立雲の蔽へるが如く、銅像の覆掛つた事は云ふまでもない。

「……玩弄品？」

「怪しからんことを――由緒は正しく、深く、暗く、寧ろ恐るべきほどのものだよ。」

唯、片手に撓めて、袖に載せた拳銃は、更に、抽取つた、血のまゝなる狼の牙のやうに見えた。

「銅像の目を射るんだ――ちかさん。」

「あら、」

思はず軽く手を拍くと、衝と寄せた、刻んだやうな美しい鼻を、男の肩に、ひたと着けて、

「いゝわねえ、賛成。……上手に射てます

か。」

其の。口振は、やゝ此の器に馴れたもののやうでもある。

「信ずるんだ。腕ぢやあない、此の拳銃を信ずるんだよ。――聞き給へ、こゝに此の銅像を除幕してから、殆ど十年に成る。これが各國に知れた頃から、私は目を射る事を、遙にまた遠く心掛けた。しかし、田舎まはりの新聞記者の下端ぢやあ、記事で、此の銅像を禮讚することを、――口惜いぢやあないか――餘儀なくされるばかりで。……射的で蝙蝠を落とす事さへ容易くは出来ないんです。

おなじく、地方を渡り歩行くうちに、――去年の秋だ。四國土佐の高知の町でね……。あゝ、遠い……。遙々として思はれるなあ。」

海に向つて、胸を伸ばすと、影か、――波か、雲か、其の臺座の巖を走る。



(その20)

「南京出刃打の見世物が、奇術にまじつて、劇場に掛つたんだよ。まともには見られないやうな、白い、西洋の婦人の裸身が、戸板へ兩腕を長く張つて、脚を揃へて、これも鋸で留めてある。繪で見ると、見るやうな、いや、看板だから繪には違ひない。……長劍を帯びて、緋羅紗を羽被つた、帽子もお約束の土耳其人が、出刃ぢやない、拳銃で撃つて居るんだ。」

此の看板を視て立つたと言ふのさへ、しみたれた了筒をさらけ出すやうで、きみの前で言ふのもお恥

かしいがね、……さいはひ夜だ、大して満員でもなさうだから切符を買った。が、目的は唯一つなんだからね、（拳銃はまだかね、）と札口で聞いたが、（え、）と札賣の娘は解りかねる。（南京の出刃打は、）と浮かり言つて、（お目當はこれからですよ。）には顔から火が出た。いま、きみに對しても汗が出る。

——悪くまた二階の正面に連れられて、所謂其のお目當を見たんだが、悉くは言ふにも及ばないけれど、……若いお嬢さんさ、其の色の白いお嬢さん——恩人だし、仙女、魔女と思ふからお嬢さんと言ふんです。看板で見たやうなものぢやかない。上品、氣高いくらゐでね。玉とも雪とも、然も其の乳、腹、腰の露呈なことは又看板以上、西洋人だし、地方のことだから、取締も自然寛かなんだらう。……暗い舞臺に浮出して、まつたく、大理石に血の通ふと言ふのだね。

——肩、兩眼、腰、足の先と、膚なりに、土耳古人が狙つて縫打に打つんだか、彈丸の煙が、颯、

颯と、薄絹を掛けて、肉線を絡ふ毎に、うつくしい顔は、たゞ彫像のやうでありながら、乳に手首に脈を打つ。――見ては居られない處を、あからめもせず瞻つたのは、土耳其の……口上が名のつた何とか。パシヤの拳銃の、其の鮮かな手鍊なんです。繕つて言ふのぢやあないが、其を見るのが目的だつた。もう一度、以前、日比谷の興行で綺麗な鸚鵡が引金を口で切つて、黄薔薇の蕊を射て當てて、花瓣を圓く輪に散らしたのを見て覺えて居る。――扱ひ人は、たしか葡萄牙人であつたと思ふ。

ゐなか記者の新聞摺れで、其處はづう／＼しい、先づ取柄です。――土耳其人にお鮓もをかしい、が、ビスケットでもあるまいから、煎餅なりと、で、心づけをして置いて、……はねると直ぐに樂屋で會つた。

私はいきなり跪いたよ。むかうが椅子でも、居所は破疊です。……恚う云ふと輕薄らしいが、眞個の處……。一生懸命で、土間でも床でも構ふ氣ぢやなかつた。拳銃皆傳の一軸、極意の巻もの

を一氣に頂かうと言ふ、むかしもの語りの術讓りの處だから。私から見れば黃石公——壁に脱いだ、緋の外套は……そのまゝ、大天狗の僧正坊……」

多津吉は銅像の腰を透かして、背後に迫つて次第に暮れかゝる山の寂寞さを右左に視たが、

「燕尾服の口上が、土地の新聞社と云ふ處で、相當にあしらつてくれる。此が通譯で……早い處……切に志を陳べたんだ。けれども、笑つてばかり居て、てんで受付けません。また土耳其人の恁う言ふ半狂氣に對する笑ひ方と云つたら、一種特別不思議でね、第一大な鼻の鼻筋の、笑皺と云ふものが、何とも言へない。五百羅漢の中にも似たらしい形はない。象の小父さんが、嚏をしたやうで、兎ぐいよ。」

鼻で巻いて、投出されて、怪飛んで其の夜は歸つた。……しかし、氣心の知れた丑の時參詣でさへ、牛の背を跨ぎ、毒蛇の顎を潜らなければ成ら

ないと言ふんです。翌晩また跪いた。が、今度は、おなじ象の鼻で、反対に、背向に刎ねられたんだね、土耳古人は向うむきに成つて、どし／＼樂屋を出したよ。刎ねられ方は簡単だけれど、今度は昨夜より落膽した。――實はうっかり言ふまいと思つたけれど、然うもしたらばと、よもやに引かされ、其の拳銃の極意を授けられたい、狙ふ目的と、其の趣意を、父の無念ばらしの復讐のために銅像の目を狙ふことを打明けたんだから、――だ。が、何にも成らない。

一  
一  
2  
1  
3  
2  
3

(その21)

興行は五日間　――　皆通つた。．．．もう  
三度めからは會つてもくれない、寄附けません。し  
かも、打方を見るだけでも、いくらか門前の小僧だ、  
と思つて、目も離さずに見たんだが、此の目の色は、  
外國人が見ても、輪を掛けて違つて居たに相違ない、  
少々血迷つてる形です。――

樂の晩だ。板礫の、あともう一場、賑かな舞踏が  
ある。――　帷幕が下りると、．．．．燕尾服の  
口上ぢやない　――　薄汚い、黒の皺だらけの、わ  
ざと坊さんの法衣を着た、印度人が来て、袖を曳い  
て、指示をしながら、揚幕へ連れ込んで、穴段を踏  
んで、あの奈落．．．．きみもよく知つて居よう  
が、別して地方劇場の奈落だよ。土地柄でも分る、  
犬神の巢の魔窟だと思へば可い。十年人の棲まない  
妖怪邸の天井裏にも、一寸あるまいと思ふ陰惨とし  
た、どん底に　――　何と、一體白身の女神、別嬪  
の姉さんが、舞臺の礫の時より、研いだやうに尚ほ  
冴えて、唇に緋桃含んで立つて居た。

つもつても知れる．．．．世界を流れ渡る、此

の遍路藝人も、樂屋風呂は何うしても可厭だと言つて、折たゝみの風呂を持參で、奈落で、沐浴をするんださうだつけ。血の池の行水だね、しかし白蓮華は丈高い。

すらりと目を眇して、滑かに伸ばす手の方へ、印度人がかくれると、（お前さんに拳銃を上げませう。）と恚う言ふんだ。少しは分る。私だつて少々は噛る。――土耳古の鼻を舐めた奴だ、白百合二朶の花筒へ顔を突込んで、仔細なく、跪いた。――たゞし、上げませう拳銃を――と言ふ意味は――打方を教へよう――だとばかり思つたのに、乳の下の藤色のタオルのまゝ、引寄せた椅子の假衣の中で、手提をパチリとあけて……品の二つ――一度取上げて目で撓めて――此の目が黒い、髪が水々と又黒い――而して私の手に渡すのが、紫水晶の筭と、大眞珠の簪を髪からぬき取つたやうだつた。……

――ちかさん、此の、袖姿見と拳銃なんだよ。――

女は息を引いて頷いた。

男が、島田の勿元結の結目を壓へた。

「此處を狙へ、と教へたんだ。」

「あ。」

「御免よ。うつかり・・・」

「あゝ、元結が切れさうだった。可厭ね、力を入

れてさ。」

と邪慳に云つて優しく視た。

「トルコ人が、頤、咽喉下から、肩、順々に――  
最後に兩方の耳の根を打つ。最々後に、絶對の危  
険を冒す全世界の放れ業だ、と怯かして、裸身の犠  
牲の脳頭を狙ふ時は、必ず、うしろ向きに成るんだ  
よ。うしろ向きに成つて、的の姉さんを袖姿見に映  
して狙ひながら、銃口を、ズツと軽く柔かに肩に極  
めて、そのうしろむき曲打にズドンと遣るんだ。い  
や、肝を冷す。（教へよう）――お嬢さんが、  
私に其の通りに遣れ、と言ふんだ。（少し離れて、  
もう少し、立つた爪尖まで、全身がはつきり映るま  
で、）とさしづをされて、さあ・・・一問半、  
二間足らず離れたらうか。――牛馬の骨皮を、  
じと／＼踏むやうな奈落の床を。――裸の姿に



―― 然も素馨の香に包まれて。

―― きみの前だが、爾時タオルも棄てたから一糸も掛けない、浴後の立姿だ。……私ほうしる向きさ。（拳銃を肩に當よ、）と言ふ、（打たうと思ふ目をお狙ひ……）と言ふ、口が苦いまで、肝を噛んで、熟と視たが、わな／＼と震へて、あつと言つて振向いた。屹となつて、（教へません、そんな事では――不可ません、）と言はれたが。蛇です、蛇です、蛇です、三足。一尺ぐらゐづゝ、おなじほどの距離をおいて、蜘蛛の巣と、どくだみの、石垣の穴と穴から、にほんブログ村と錘首を揃へたのが、姉さんの白い腰に、舌をめら／＼と吐いて居るんぢやあないか。――歴々と袖姿見に映つたんだ。

(その22)

心もち肩を落して、乳房を抱いたが――澄ましてね、此等の蛇は出て来るんぢやあない。遁げて引込むんだから心配はない。――智慧で占たのではない事實だ、と云ふんだ。湯を運ぶ印度人が、可怖く蛇ずきの悪戯で、秋寂びた冷気に珍らしい湯のぬくもりを心地よげに出て来る蛇を、一度に押へてせつちや、つして、遁げ込む石垣の尾を二疋も三疋も、引掴み、引掴み、ぬき出しは出来なかつたが、断れたら食かねない勢で、曳張り曳張りしたもんだから、三日めあたりから――蛇は伶俐で――湯のまはりにのたつて居て、人を見て遁げるのに尾の方を前へ入れて、頭を段々に引込める。(世のはじめから舵は智者ですよ。)と言ふ。まづたく、少しつゝ鱗が縮んでぬる／＼と引込んで、鼠の鼻ツさが挟つたやうに成つて消えたがね。奴等の、あの可厭らしい目だの、舌の色が見えるほど、球一つ……お嬢さんは電燈を驕つて居てくれただんだ――が、其の光さへ、電光か、流星のやうに見えたのも奈落の所爲です。

遣直して肝を嚙んだ。――（此の二つた目が、  
袖姿見の裡の此の二つた目が、瞬いたと思ふ、其の  
瞬間を射るんです。）同じやうにして、うしろ向  
きに凝視めて居れば、瞬くと思ふ感じが其の銅像の  
場合にも顯はれる。魔の睫毛一毫の秒が屹とある。  
其處を射よ、屹と命中る！私も世界を廻るうちに、  
魔の睫毛一毫の秒に、拙な基督の像の目を三度射た、  
（ほゝほ、）と笑つて、（腹切、淺野、内藏  
之助　――　仇討は・・・おゝ可厭だけれど、  
復讐は大好き　――　確り其の銅像の目をお打ちな  
さいよ。打つ礫は過つて其身に返る事はあつても、  
弾丸は仕損じてもあなたを損ひはしません。助太刀  
の志です。）――　上着を掛けながら、胸を寄せ  
て、鳴をしてくれました。トタンに電燈を消したん  
です。（魔の睫毛一毫の秒でしたわね、）　浪を  
行く魚、中空を飛ぶ鳥に、なごりを惜むものではあ  
りません　――　流星は宇宙に留つても、人の目に  
觸るゝのは唯一度ですもの、と云つて、・・・  
別れました。

分けました。其の姉さんには別れた、が、きみと

は別れまいね。」

と言つた、袖姿見は男の胸に、拳銃は女の肩に掛つたのである。

御手洗を前にして、やがて、並んで立つた形は、法界屋が二人で屋臺のおでん屋の暖簾に立つたやうである。じり／＼と歩を刻んで、恰も此處に位置を得た。袖姿見は、瞳の如く背後ざまに巨なる銅像を吸つた。拳銃は取直され、銃尖が肩から覗いた。……磨いた鐵鎚のやうに、銅像の右の目に向つたのである。

さすがに色をあらためて、

「氣味が悪からうとは、きみだから言はない。――

私が未熟だから、危いから、少し、そちらへ。」

「着ものを脱いで、的にも立ちかねないんですが

ね。」

と、自若として、微笑ながら、

「あなたの柄だと、私は矢取の女がやうだよ。」

「馬鹿な事を。――真劍だ。」

「あなた。」

と面を引緊めた。

「……………」

「一つは射てますわね。……………魔のお姫様の直傳ですから。……………でも、音がするでせう、拳銃は。お嬢さんが耶蘇の目を射た場所は、世界を掛けての事だから、野も山も些と此處とは違ふやうです。目の下が、すぐ町で、まだ其の邊に、人は散り切りません。天狗が一二枚もみぢの葉を取つたつて、すぐ山巡吏の監督が出て来るんぢやアありませんか。——此の静さぢや、音は城下一杯に飮します。——私に其の鑿をお貸しなさいな。」

「鑿を。」  
「兇惡をなすに、責を知つて、後事を托せよと言ふが如く聞えて、頷いて渡した。」

「拳銃をお見せなさいな。」

「……………拳銃を。成程、引續けて二度狙ふのは、自信がない、連發だけれども、」

空を打たれて、手練に得ものを落されたやうに  
 ー 且つ器械を検べようとする注意だと思つた  
 やうに、ポカンと渡すと、引取るが疾いか、ぞろり  
 と紅の褌を絞つて小褌をきり／＼と引上げた。落葉  
 が舞つた。颱風に乗るやうに振袖はふつと浮いて衝  
 と飛んで、臺座に驅上ると見ると、男の目には、顔  
 の白い翡翠が飛ぶ。ひら／＼と銅像の襞を踏んで、  
 手が其の肩に掛つた時、前髪のもみぢが、薄の簪を  
 誘つて、中空に翻るにつれて、はじめて、臺座に揃  
 へて脱いだ草履が山へ落ちた。

一  
 一  
 2  
 3  
 3  
 3  
 5

(その23)

「あ、あ、あ、あんなものが、あゝ、運五郎、倅、  
運五郎、山の銅像に天人が天降つた、天降つた。  
おゝ、あれは、あれは。やあ、大きな縞蛇だ。運五  
郎、運五郎。ー いや、鳥だ、鳥だ。・・・  
青い、白い縞が、紅い羽もまじつた。やあ嘴で目を  
つゝく。」

銅像が、城の天守と相對して以來、美術閣上の物  
干を、人は、物見と風説する。・・・男女の禮  
拝、稽首するのを、運八美術閣翁は、白髪しろがみの総髪そうがみに、  
ひだなしの袴はかまがいつもして、日和ひよりとさへ言へば、も  
の見みをした。馴なれて、近來きんらいは然さうまでもなかつた處  
に、日ひの今日けふは、前刻ぜんこく城寄しろよりの町まちに小火ほやがあつて、煙けむり  
をうかゞひに出でたのであるが、折をりから小春風こはるなきの夕晴ゆふばれ  
に、來迎らいがうの大上人だいしやうじんの足あしもとに、ぬかごの如ごとく人のゆ  
ききするのを、心地こゝちよげに、久しぶりに見惚みとれて居あ  
た。尤もつとも其その間に、遊廓いづくわくの窓まどだの、圍かこひもの小座こゝし  
敷きだの、豫かねて照準せうじゆんを合あはせた處ところを、夢中むちゆうで覗のぞく事ことを  
忘れわすれない。それに此この器きは、新式精銳しんしきせいえいのものでない。  
藩侯はんこうの寶物藏ほうぶつざうにあつたと言いふ、由緒ゆゑしよづきの大おほきな遠目とほめが  
金かねを臺たいつきで廻轉くわいてんさせるのであるから、いたづらも

のを威嚇するのは十分だが、慌しく映るものは――  
天女が――縞蛇に――化鳥に――  
また忽ち……

「やあ、轆轤首の女だ、運五郎。」  
ドシンと天狗に投げられたやうに、翁は物干に腰  
をついた。

島田の鬢の白い顔が、宙にかゝり、口で銅像の耳  
を噛んで踏むに、袴の紅を、二丈六尺、高く釣り  
つゝ、鑿を右の目に當てて、雪の腕に、拳銃を、鐵  
鎚に取つて翳した。

銅像の左の目は、同じ様にして既に一撃を加へた  
後である。

まことや、魔の睫毛一毫の秒に、いま、右の目に  
鑿を丁と打つたと思ふと

「キイー」  
と聲の絲を切つて、振袖は銅像の肩から、ずる／



と、迂り落ちた。あはや臺座に留まらうとして、術の施す隙なき状に、其のまゝ仰向けに黄昏の地に吸はれたが、白脛を空に土を蹴て、褌をかくして俯向けに成つて倒れた。

讀者の、もの狂しく運八翁が、物見から、弓矢で、或は銃で、射留めた、と想像さるゝのを妨げない。弾丸のとどかない距離をまだ註しては居なかつたら。況や、翁は、舊藩の士族の出であるものを。

「――事實を言はう、口惜いが、目が光つたんだ。塹で突き潰すと、銅像の目が大きく開いて光つたんだ。……女は驚いて落ちこんだ。」

多津吉は、手足を力なく垂れた振袖を、横抱きに胸に引緊めて、御手洗の前に、ぐたりとして、蒼く成つて言つた。

銅像の肩から轉落した女を、きつけの水に抱込んだのは殆ど本能的であつたと言つて可い。しかし、鬢も崩れ、髪も濡れて、二人とも頭から水だらけに

成つて居るのは　――　――

「ベツ、此奴等、血のついた屑切なんか取散らかして、蛆蟲め。――　此の靈地を何うする。」

自動車の助手に、松の枝を折らせ、掃立てさせた傍ら、柄杓を取つて、パツ／＼と水を打つ次手に、頭とも言はず肩とも言はず、二人に浴びせかけたのは、銅像の作家、東京がへりの長髪の運五郎氏で、閻翁運八とともに、自動車で驅上つて来た事は更めて言ふに及ぶまい。事實に逢着すると、着弾の距離と自動車の速力と大差のない事に成る。自動車の方が便利である。

侮辱と唾棄の表現のために、刎ね掛けられた柄杓の水さへ救の露のしたゝるか、と多津吉は今も戀人の生命を求むるのに急で、焦燥の極、放心の體で居るのであつたが。

(その24)

「近視の倅が遣りさうな事だわい。不埒ものが。……其の女は、そりや何だ。」

袴腰に兩腕を張つて覗込む、運八翁に、再び蒼白顔を振上げた。

「門附藝人です、僕の女房です。」

「う、う、お、似合うたな、おなじやうに。」

「あ、お父さん——郡は拳銃を持つて居ま

すから。」

少し離れて半圓を廻はして、遊山がへりの——  
自動車より前に駆集つた群が、間近くも寄らない

のは、銅像に攀ぢた魔の振袖のはじめから、何とな  
き此の拳銃の影であつた。

集へる衆の肩背の透に、靈地の口に、自動車が見  
えて、巨像の腹の鳴るが如く、時々、ぐわツ／＼と  
自己の存在と生活を叫んで居る。

此の時しも、軽装した助手は、人の輪の前をぐる  
り／＼と柄杓を上下に振つて廻つた。

「拳銃を……拳銃を……」  
「他を打てか、自らを殺せか——呼吸の下で、  
幽に震へた、女は、まだ全く死んでは居ないのであ  
る。」

「危い、お父さん。」  
「——早く警察へ。」  
「何をし得るものだ。——いや、時にいづれも、  
立合はるゝ、いづれも。」

運八翁は、づか／＼と横歩行きに輪の眞中へ立つ

て、

「俺と倅の、この製作の名譽を嫉んで。」

「然うです／＼。」

運五郎氏も、並んで、細い杖を高らかに振った。

「大銅像の目を傷けたんだね、兩眼を――潰  
すと齊しく靈像の目が生きて光つて開いた、蟲の投  
落されたのをよく視て下さい。」

「柴山運八。」

「運五郎、苦心の製作に對して。」

と云つた。

「あはッ、はッ、はッ、はッ、はッ。」

と笑つたものがある。此の時、銅像が赤面した。

一朵の珊瑚島の如く水平線上に浮いた夕日の雲が反  
射したのである。肩まで霧に包まれた其の足と、臺  
座の間に、ちよぼりと半面を蟋蟀の如く覗かせて見  
て居た、埃だらけの黒服の親仁が、ひよいと出た、  
妙な處に。――尤も、此の山のかゝる時には、砲  
臺形に並んだ丘の上をはじめ、少し脊の高い松のど

の樹にも、天狗が居て、翼を合せ鼻を並べて見物する。親仁は、てく／＼と歩み寄ると、閤翁父子の背後へ、就中、翁の尻へ、いきなり服の尻をおツつけるが如くにして、背合せに立つた。乃ち銅像に對したのである。

一人やなんぞ、氣にもしないで、父子は澄まして、衆の我に對する表敬の動揺を待つて、傲然として居た。

黒服の親仁は、すつぽりと中山高を脱ぐ。兀頭で、太い頸に横皺がある。尻で、閤翁を突くが如くにして、銅像に一拝すると、

「えへん。」

と咳き、がつしりした、脊低の反身で、仰いで、指を輪にして目に當てたと見えたのは、柄つきの片目金、擴大鏡を當がつたのである。

「は、は、は、違ふ、違ふ、まるで違ふ。此の大道の團栗目は、はじめ死んで居つた。それが鑿で

活きたのぢや。即ち潰されたために、開いたのぢや。

「何。」

「あ、先生。」

と、運五郎氏がギクンと首を折つた。

「柴山君、しばらくぢや。」

「お父さん、お父さん、榊原 俊明先生で

す。」

東京 (一) 藝學校の教授にして、

(貳) 術院の委員、審査員、として、玄武

青龍はいざ知らず、斯界の虎！ はた其の老鈴の故

に、白虎と稱へらるゝ偉匠である。

惟ふべし近常夫婦の塚に、手向けたる一捻の白饅頭の活けるが如かりしを。しかのみならず、梅鉢草の印の鑿を拾つて、一條の奇蹟を鷄に授けたのを。

「えゝ、えゝ、大先生、倅が豫て……」

儀禮に、こだはりの過ぎるほど訓練のある、特に官職に對して謙屈な土地柄だから、閣翁は、衆に仰むけに反らした丁ど同じ角度に、其の頭を臍に埋めて、手を垂れた。

「――間違うても構はんです。あんた方の銅像に對する、俊明の鑑査はぢやね。」

古帽子で、ポンと膝頭を敲いて、

「今の一言の通りです。」

父子は、太息を通して、目を見合つた。

「せち辛い世の中ですので、鑑査の報酬を要求します。はつ／＼はつ。其の料金としてぢやね、怪我人を病院へ馳らす、自動車を使用しますぞ。――用意！……自動車屋。」

柄杓とともに、助手を投出すと齊しく、俊明先生の兀頭は皿のまはるが如く向かはつて、漂泊の男女の上に押被さつた。

「別嬪。」



「あれ、天………狗………さん。」  
「然矣、天狗が承合うた、屹と治るぞ。」

道中皴の手巾で、二人の頭も顔も涙も一所くたに  
拭いて遣りつゝ、

「する事は亂暴ぢやが、あゝ、優しいな。」  
と、ほろりとして言つた。

【完】

—  
—  
2  
5